

昭和の記憶 季刊誌

しせい
市井の昭和史

平成 17 年夏号

昭和の記憶ブックレット No 3

目次

刊行によせて	3	寄稿
多湖輝先生（千葉大学名誉教授） <small>たこあきひ</small>		私的『土佐源氏』考
聴き取りの記録		秋山真志（作家）
澁澤雅英さん（80）	8	
小笠原六太郎さん（79）		編集後記
タエさん（73）	32	活動紹介
寺倉清之さん（92）		刊行の言葉
とよ子さん（86）	40	120
石川テルさん（89）	66	119
逸見芳子さん（84）	80	118
和田敏子さん（83）	104	

「NPO」昭和の記憶」季刊誌創刊号の刊行に寄せて

多湖輝^{たこあきひ}（千葉大学名誉教授）

多湖輝（たこ・あきひ）
千葉大学名誉教授、東京都「心の東京革命」推進協議会会長、「頭の体操」著者。

心の東京革命
次代を担う子どもたちに対し、親と大人が責任をもって正義感や倫理観、思いやりの心を育み、人が生きていく上で当然の心得を伝えていくことを目標とした、東京都の取り組み。

今年は、太平洋戦争終戦六十年目にあたります。戦後、日本はめざましい発展を遂げてきました。そして現在、日本は世界に誇るべき技術や文化を持っています。しかしながら、そうした繁栄の陰に、残念ながら今の日本には、たくさん問題もあります。

現在、私は東京都知事の進めている“心の東京革命”の推進協議会会長という役を仰せつかっています。今の子供たちを見ても日本の陰の部分をよく見てとることができません。

まず、「自己を主張し、他人の意見を聞くことができない」という子供が大変多い。そして、親や教師を敬う気持ちを知らない子供

も少なくない。

また、親が学校に躰を求める時代になったことも、大きな変化です。以前では、躰は家でするもので、学校は学ぶ場所。そして、それを教える先生は「師」であり、子供たちは尊敬をしたものでした。

それが今はどうでしょうか？ 教師による犯罪もあれば、親が「子供がうるさい」といって殺人事件まで起きてしまう。

これは一体どうしたことでしょうか？

幾つも理由は挙げられましようが、理由の一つに生活の変化があると思います。

昔の日本の子供たちは、親に言われなくとも兄弟が小さいと、自然と弟や妹の世話をしたものでした。また、おじいさん・おばあさんと共に暮らすことを通じ、父や母にない知識の多さを目の当たりにします。

しかしながら、現在は核家族化が進み、父母とその子供しか家庭の中に存在しません。



多湖輝先生

子供の成長期における「核家族」と「二世世代家族」の違いとは、一体何でしょうか？

一つには、三世世代家族の場合、自分の親がおじいさんやおばあさんを敬う姿を目の当たりにしているという点が挙げられます。

こうしたことから、目上の方に対する尊敬の念というものが養われます。

そして二つ目は、歴史観です。

子供たちは、教科書の中の世界と、現実に日本がたどってきた真実は、全く別のものとしてとらえがちです。

それが、「おばあちゃんは若い頃にね……」と話聞かせることで、子供たちはそんなことがあったのだということ、本などを読むよりはるかに実感できます。

その上に、話を聴く姿勢もできてきます。

今の子供たちや若い世代の人の多くは、主張することができても、相手の言葉を「聴く」ということができません。

これは、集団生活の中でも支障をきたすことになりそうですが、

それなりに学校生活を送っている。それは、学校生活や子供たちを取り巻く環境がそれに合わせてきているということが言えるのではないのでしょうか？

一昔、学級崩壊という言葉がマスコミを騒がせました。

これは、学校において、授業中に席を離れたり、私語をするなど、自己中心的な行動をとる子供により、授業が成立しない事を指します。キレる子や、ムカツク子の出現によって学級が荒れたり、さほど荒れていなくても、逆に感情を表さない子供が多くて、学級としてまとまらない状況です。これにより、授業ができなくなると、授業崩壊となります。

この、キレる・ムカツクというのも、聴く力がない子供たちが増えた結果ではないでしょうか？ 聴くということは、簡単に見えませんが、実はそうではありません。

何気なしに音声だけを聞いているのではなく、心を傾けて能動的に相手の気持ちも聴くことができこそ「聴く」という言葉で表さ

れるのです。集中して相手の言葉や思いに耳と心を傾けることは、コミュニケーションの基本です。

これができずして、集団生活や学校生活は困難です。ですから、本来は家庭でこういったコミュニケーションの基本をクリアする必要があるはずです。

これは、何も特別な教材が必要なわけではありません。人間は本来、生活の中でこれを体得できていたはずなのです。

それが三世代家族であり、そうでなくとも、おじいさんやおばあさんの存在がこの役割を担ってきたのです。

離れている家族が久しぶりに会った際に、おじいさん、おばあさんの昔話に耳を傾ける。

こういったことは、実は簡単にできる子供の大切な教育なのではないかと思えます。

澁澤雅英さん(80)



澁澤雅英(しづさわ・まさひで)さんの来し方

一九二五年、渋沢敬三の長男としてロンドンに生まれる。

東京大学農学部卒業。(株)東食を経て、現在、渋沢栄一記念財団理事長のほか、東京女子館英字長・館長など多くの役職を務める。

著書に『父・渋沢敬三』『太平洋に架ける橋 渋沢栄一の業績』『日本を見つめる

東アジア』『太平洋アジア 危険と希望』などがある。

今回、雅英さんとお会いするにあたり、宮本常一の『旅する巨人』を読み直した。民俗学者であり、また事業家でもある渋沢敬三。そして、多くの事業を興し、「日本資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一。そんな偉大な方々の血を引き継ぐ雅英さんとお会いできることになり、その前日、私は眠れなかった。そして当日、緊張のあまり、何をお話しすればよいのかわからなくなっている私に、雅英さんはやわらかな物腰で、戦時中のお話や、海外で思い出を語ってくださいました。偉大なことを成し遂げたパワーの中にも、生来の品の良さを感じました。(わぐり)

澁澤さんは、今年八十歳になられるのですね。

澁澤 私は、昭和と同一年なんですよね。だからずーと始めから昭和を見ていたわけです。良い思い出というわけではありませんが、兵隊にいったことがあります。個人的には珍しい思い出といったところでしょうか。

やっぱり、戦後の昭和の面白さというのは、戦後、日本がだんだんいい国になっていったということだと思っんですね。最初、日本はとても貧乏で、とても大変でしたけれども 私の家は基本的に破産しましたし 大変だった。でも、みんな破産しましたからね。あまり「大変だ！」という感じはありませんでした。

私も貿易会社に勤めたりなんかして、日本の高度成長に参画した参画でもないけども その一部だったというかね。日本の戦後の政策が良かったからだと思っし、世界の環境も良かったんでしょね。それにつれて、経済も良くなってくるし、社会的にも、戦前の一種の階層社会みたいなものはなくなりました。

渋沢栄一（しづさわ・えいいち）
天保十一年（一八四〇年）、埼玉県血洗島村（現・深谷市）生まれ。一八六九年、大蔵省に入省。退任後、第一国立銀行を設立。その後、抄紙会社を始め、商法講習所、東京海上保険会社、大阪紡績会社、共同運輸、東京瓦斯、帝国ホテル、札幌麦酒、石川島造船所など、五百余の会社の設立に関与し、「日本資本主義の父」と呼ばれた。

それから権力。たとえば「お巡りさん」なんていうのが、昔はいたんですよ。今は「警察官」と言っただろうけども。おっかなかったですよ。

しかし、これが戦後、非常に変わりましたね。今でも何か悪いことすれば恐いんでしょうが、しなければなんていうことはない。

お生まれは、イギリスでしたよね？

澁澤 偶然ね。ただ生まれたというだけ。記憶も何もありません。

でも、イギリスとは縁があるという感じはしていました。会社でも英国の駐在になったし、その英国の研究所で仕事しました。英国とは縁が深かったですね。

お生まれに成ってから、英国にはどのくらいいらしたのですか？

澁澤 すぐに日本に来ましたので、六ヶ月か七ヶ月くらいです。

渋沢栄一という人が、その頃、もうすでに八十五歳かな？ だから、だんだんと体が弱ってきたというので、父が「早く帰らなくちゃいけない」と慌てて帰って、母は私を連れて帰ってきました。

あの頃は飛行機なんかありませんから、帰るといつてもふた月ぐらいかかる、もう船旅ですね。良かったんだと思いますが、私は覚えていません。

戦争がはじまった時はお幾つでしたか？

澁澤 十六歳です。

実際に戦地には？

澁澤 戦地には行っていません。

私は、前橋にあった陸軍の予備士官学校に入ったんですけれども、八ヶ月ぐらいいましたかね？ 十月に入って翌年の六月に卒業したんですから。

それで、見習い士官になって東京に帰ってきました。その時にはもう、私の一期前の予備士官の先輩は、かなりフィリピンなんかに行っていました。一割か二割ぐらいは、戦死したりなんかしたんじゃないでしょうか？ 場所にもよるでしょうけど。それに、船もずいぶん沈みましたしね。

非常に不安定で、「明日何が起こるかわからない」という状態にみ

予備士官学校

士官学校が上級将校（現役軍人）を養成するのに対して、科ごとに分け、専門的力をつけさせ、短期間で戦場で役立つ下級将校を養成するところ。戦局が窮迫した時期にはいると、「学徒動員」で学生を予備士官学校に入校させた。

んなが慣れてしまつて暮らしていた。だから、自分の家が焼けてしまつても「あー焼けたわ」ってなもんでね。今だったら大変ですよ、大騒ぎして。

東京に戻つて来られた時、町の様子はいかがでしたか？

澁澤 六月の四日か五日に卒業したんだつたと思いますが、前橋から夜行列車に乗つて 上越線だったかな、渋川から全員乗りましたから特別に貸切です。それで渋谷まで帰つてきて、渋谷からすぐその元防衛庁があつたところに、配属になつたんです。そこまで行くにしても、何にも交通機関がないので歩いて行くわけですよ。まあ、たいした距離でもないんですが、その間、家はほとんどない。街路樹もみんな焼けちゃつて、真っ黒になつて、家というのは壁が残っている程度で、ほんとに焦土、焼け野原でした。青山通りなんて、もう惨憺たるものですね。今、ちよつと信じられないですけど。

焼けたことは聞いていましたか？

澁澤 焼けたことは知っていました。五月二十五日の空襲で、このあたりが焼けたんですけれど、そういうことは、前橋にいてもわか

りました。それに、だいいち夜中に、東京のほう真っ赤になつていたので、これはそうとうやられたなと思ひました。

だから、私の家も当然なものだと思つていたんですが、不思議に残つていたんです。

三田のご自宅ですね。

澁澤 そうです。焼夷弾が落ちただけでも、そこに人がたくさんないたもんですから、皆で消したので、それでどうにか残つたようですね。

見習い士官というのは、好きなときに外に出られるんです。缶詰にはなつていない。ですからその部隊に入った翌日、私は朝早く起きて、のこのこ出てきて六本木の交差点に立つたんですけれど、ぜんぜん家がないわけです。そのあたりにね、何にもないんです。だから、私の家の丘が見えるわけです。

今は、そんなもの全く見えませんけれどね。そのとき、僕は東京というところは、丘と谷の町だと知りましたよ。

ここ（国際文化会館）も丘でしょ。渋谷のほうに行く間に丘があ

りますよね。こっちも三田の丘 台地というのかな？ 地質学的には、よくわかりませんが。

とにかく江戸時代は、川に沿って村ができていったから、青山なんかは台地で農地だったんでしょね。その頃は、木もいっぱい生えていたんでしょうけど、終戦の直前というのは、木も何もなかったから、何でも見えたわけです。それが僕には非常に印象的でした。「東京ってこういう町だったのか」と。

今、六本木ヒルズの建ってるあたりは、私が小さいときによく歯医者に行ってたね。当時は、小さな屋敷町というか、まあちよつとしたお家が並んでいる静かなところでしたよ。

それがああいうものになっちゃうなんて、すごいものですね。もちろん、高速道路なんて考えることもできませんでした。でも、十年ぐらいで変わっちゃうんだからすごいですよ。

終戦の日は東京にいらしたのですか？

澁澤 見習士官のまま、千葉県に転属になりました。柏というところに行って、そこで終戦ですね。

玉音放送は聞かれたのですか？

澁澤 聞きましたね。聞きましたけれど、あんまりよく聞こえなかったですね。

ただね、私は歩兵隊なんですけれども、通信隊というのがありまして、そこに所属していたんです。だから、防空壕の中には無線機が沢山入っていました。それでそのアメリカの放送が聞こえるんです。

「ボイス・オブ・アメリカ」というのが、当時のアメリカ側の宣伝機関なんです。一般には聞かせない方針だったんですが、軍だから聞こえるわけです。私はそこに入り浸って、そればかり聞いてましたよ。だからニュースなんかよく知っていました。そこに行つたのは七月だったと思いますが、もう、終戦の話になっていましたからね。ポツダム会議なんかあって、逐一そのニュースで言うわけですよ。日本語でちゃんと話すしね。ちよつと変わった日本語だったけれども……。

日本政府がそれを受け入れるのか、受け入れないのかということ

玉音放送

昭和天皇による大東亜戦争敗北宣言。昭和二十年八月十五日正午にラジオ放送された。国民にとって、天皇の声を聞く初めての機会となった。

ボイス・オブ・アメリカ

米国防総省国際報道局が提供している敵対国、占領国、同盟国などに向けたラジオ放送局の名称。

をやっているわけです。当時の政府は、あれはみな宣伝だと、言っていたようですけれど、そんな感じではなかったですね。相手は自信たっぷりだし、私はもう負けるなと思っていたから、問題は、いつ、どう負けるのかということでした。ポツダム宣言を受け入れる条項とかなんとか、無線で言っていましたから、私にとっては面白かったですよ。

通信兵のとき、危険な目に遭いましたか？

澁澤 ないですね。でも、お腹がすいてしかたがない、という危険のほうがありました。食べるものがないからね。

士官学校つてみんな若いでしょう、私は十九歳から二十歳になったばかりですから。食べるものがろくにないし、コーリアンの飯とかを食べましたよ。でも足りないんです、しょっちゅうお腹をすかせていました。

だから、風邪でも引くと大病になっちゃう人もよくいましたし、実際、栄養失調になった兵隊もかなりいました。戦争の危険よりも、そういう危険のほうが多かったですね。

コーリアン
中国北部で栽培されるモロコシの一種。

一般的には、戦争の危険というと、爆撃と機銃掃射ですかね。機銃掃射というのは、とても怖かったです。部隊にいますからね。そこを狙い撃ちされるんです。でも防空壕に入っていれば、別に何でもありませんけれど。

そのうちに、原爆が落ちたということになって、「これはもうだめだ」と私は思いましたし、あの放送を聞いた人は、みんな思ったんだと思いますよ。それがどういふ爆弾なのか、始めはよくわからなかったけれども。

私は、東京に時々出てきて家にいましたし、帰ると父親もいました。家が大きかったものですから、焼け出された人がみんなで共同生活をしていましたね。おじさんとか従兄弟だとかいっぱいいました。おじさんというのは、わりと偉い人だったし、父（敬三）も日銀総裁をやっていたわけだから、周りの人は、いわゆるリーダーですよ。

だから、僕が「もうダメなんですよ」と言つと、「そんなこと言っちゃいけない」と言われた。でも、みんなダメだと思っているわけ

渋沢敬三（しづさわ・けいぞう）

明治二十九年生まれ。渋沢栄

一氏の孫。財界人であり、民

俗学者。日本銀行第十六代総

裁。昭和三十八年、死去。

ですよ。

戦争当時というのは、お屋敷で働かれていた方など、どうい
う感じだったんでしょうか？

澁澤 大きな家だったので、しょっちゅう直したりしなければい
ないから、戦前から大工さんが住んでいましたね。その大工さんの
他に、執事さんという事務をする人がいましたね。だから、家庭と
いうものよりも、共同生活の団地みたいなものでした。

大工さんと言っても子どももいましたから、小さい頃は、その子
とよく遊んでいました。

今は、別の建物になってしまったけど、昔は家のすぐそばに警察
署があったんです。戦争中は、その刑事さんが泊まっていた
よ。大災害があったときに、すぐに来られないといけないからって。
常時、七、八人の刑事さんが泊まっていましたね。その人たちがいた
んで、焼夷弾なんかを消してくれたんだと思いますよ。そうでなかつ
たら焼けていましたよ。

周りのお宅などは、結構焼けていたんですか？

小泉信三(こいずみしんぞう)
明治二十一年、東京生まれ。
経済学者、文筆家。慶應義塾
長を務めた後、皇太子殿下(今
上天皇)の御教育常時参与。
昭和三十四年には、文化勲章
を受章した。

澁澤 お隣ではないんですけれど、ちょっと離れたところに、小泉
信三さんのお家があったね。あの方は、すごいやけどをされたんで
す。ちょうどその日ですよ、五月二十五日。あの方は、非常に整った
立派な顔をした先生なんです。でも、見る影もないやけどをされ
ました。でも幸いお元氣になられて……。

お父様が日銀総裁をされていたころは、渋沢さんご自身はど
ういった生活をされていたのですか？

澁澤 仕事のことには私にはわかりませんが、僕は学校に行っ
てましたから。しかも、勤労奉仕でしょっちゅう出てました。

埼玉県の農家に行つて、稲刈りを手伝ったり。よかったですよ、
非常に。食糧はあるし空気はいいし……。

僕が行つた高等学校は武蔵高校というんですけど、その連中が
ある村にたくさん行っていまして、みんな仲良くなって、戦後もそ
こに買出しに行つたんじゃないかな。私は行かなかつたけれども。

戦争が終わって、復興していくときの日本は、どのような感
じだったんでしょうか？



澁澤 まだ闇市がそこらじゅうにありました。新橋なんか闇市だらけで、銀座通りだって、変な屋台がいっぱい並んでいてね。かつてのバンコクとか、もつとひどい時分のカルカタみたいな感じでしたよ。みんな食べるものはないし、どうしていいかわからないで、目がつりあがっていましたね。

牛乳にしても、今はみんな同じものを飲んでいるでしょ。でも、当時は新潟の牛乳と東京の牛乳は、ちょっと違う感じでした。でも今は全部同じでしょう？ 大きな会社がやっているからかもしれないけれど、全国同じものを食べている。それは、昭和時代の非常に大きな変化ですね。

だって、戦前はそうではなかったですよ。

例えば、魚。私のような大きな家には、魚屋が桶かなんか担いできて、「今日はカツオがありますよ」などと言う。

今はそういうものの買い方ってのはないですよね。そういう意味で、生活が非常に変わった。それも十年か十五年の間が変わっちゃうんだからすごいですね。だから 他の人はどうか知りませんが

私の世代の人は変化には慣れちゃったという感じがありますね。時代は変わるもんだと。

戦前あったものが、戦争を境にして大きく変わったということですね。地方の様子はどつだったのでしょうか？

澁澤 私の母親と妹二人は、青森に疎開したんです。私が前橋にいる間に行ったんじゃないかな。それで、その冬ぐらいに、青森に会いに行きました。

そのとき、青森には二、三ヶ月いまして、自転車で動き回ったりしましたけれども、田舎は平和でしたね。大変ではあったけれども。青森県といったら、本土の最果ての地でもありましたし、静かな感じでしたね。

で、食べるものがないわけでもない。むしろ都会の人のほうが苦しんでいました。お米がないということで、お米の配給なんてずーとやっていましたからね。

戦争が終わって、お仕事に就かれてからの、思い出や印象深いこととか何かありますか？

澁澤 最初は大学にいましたから、アルバイトみたいなことをして
いました。戦争中に大学に入ったんですけれども、帰ってきてから
大学に復学したんです。

でも、大学があんまりおもしろくない 私が勉強好きではない
ということもあつたかもしれませんが だから、あんまり大学へ
行かないで遊んでばかりいましたね。

アルバイトしたりして。今のフリーターですね。(笑)

それでも、どうにか卒業はしました。でも、あまり勉強しなかつ
たですね。というのは、大学が「革命をやるんだ」という雰囲気で
したけど、私はそういうのはあまり好きでもなかつたんです。それ
に、日本がどうなるかわからなかつたしね。わからないのに、誰か
を応援するとうわけもいかないから、遊んでいたほうがいいかな、
と。

でもね、とにかく卒業はしたかった。

というのも、卒業する前に恋愛をしまして、「この人と結婚しよ
う!」と思った。そのためには、卒業しなければならぬ、就職し

て給料をもらわなければならぬ。ということでアルバイトを始め
たんです。

その職場というのは、三井物産の分かれた会社でした。三井物産
は解散、分裂して、私は小さいのに入ったんですけれど、これは非
常にいい勉強でしたね。日本の貿易というものが、どういう構造で
成り立っているのかがよくわかりました。会社には、戦前の先輩た
ちがいっぱいいましたから、彼らからいろいろなことを教わりまし
た。戦後の混乱の中で、商売になるような形をつくるというのが、
当時の仕事ですからね。おもしろかったですよ。私は、そういうこ
とを知りませんでしたしね。

ちよつとつっこんだことお聞きするようですが……、その恋
愛は成就されたのですか?

澁澤 成就しましたよ。今でも一緒におります。

素敵ですね。

澁澤 五十四年間。

その出会いは?

解散

ここでは、財閥解体を指す。戦
後、GHQによって遂行され
た占領政策の一つ。財閥が侵略
戦争遂行の経済的基盤になっ
たとし解体を命じた。三井、三
菱などが対象となった。

澁澤 若者が集まるパーティーみたいなものがあって、そういうところで、何となく知り合っただんじゃなかったかな。そして、何となく気があって……。

結婚されたときの思い出は？

澁澤 そうですね。私は農学部農業経済というところにいたんですが、そのとき、三重県の鳥羽に真珠養殖について調べに行っただけです。卒業しなきゃということ、それを論文にして卒業したわけだから、彼女も卒業論文を作るのを助けてくれました。そして、新婚旅行もそこでした。

何しろ、お金もないし物もないから、お米を持っていかないと泊めてくれないんですよ。だから、みんなお米を持って歩いていたわけです。あるいは、配給切符みたいなもの持ってね。そうしないと宿屋も泊めてくれないし、泊めてはくれるかもしれないけれど、食べさせてくれないんです。

それに、今みたいに立派なホテルがあるわけじゃない。そのときは、その真珠屋さんの家に泊めてもらったりしました。よく覚えて

いないけれど、奈良へ行つて、普通の民家に泊めてもらったりもしました。

当時にしてやや華やかだったのは、京都で観た都をどり。とてもきれいでした。僕はあの頃、歌舞伎とか好きでしたから観たんですけどね。それから帰ってきました。一週間ぐらいでしたかね。

京都まで行くのに一晩かかった時代です。夜行で行きました。夜十時ごろ東京駅を出て。今で言うグリーン車でしたけど、あんまりたいしたグリーン車ではなかったなあ。それで、目が覚めると名古屋。近鉄があっただんだと思います。それに乗ったり。

鳥羽、奈良、京都を周遊されたのですね。

澁澤 あんな不安定な時代によくあんなことしたもんですね。彼女がよく決心したもんだと思って感心しています。まあ、縁というんですね。

その後、お子さんは？

澁澤 はい、二人生まれましたね。女の子と男の子ですけど。

それで、私は、ロンドンの支店に行くことになって、一年以上い

都をどり
毎年四月、祇園甲部歌舞練場
で開催される祇園甲部の舞踊
公演。

ましたかね。しかし、当時は外貨がないから、家族は連れて行けないわけです。私には、食べられるくらいのお金をくれるだけけれど、家族を連れて行けるのは、支店長だけだったんです。日本は、外貨がない国だったから。

当時のロンドンは一ポンド千六十円という値段だったんですよ。今は、百六十円とか百八十円とかでしょう？ それだけ貧乏だったということですよ。だから、英国はすごいお金持ちに見えました。その後で、研究所で働くようになった時には、千六十円が百六十円になっちゃったから、家内と二人で行っても、随分いいアパートに住むことができるようになりました。

初めは単身赴任でいらしたんですね。当時の一人暮らしは、どんな風だったんでしょうか？

澁澤 東京では給料が一万円になるかならないかくらいでしたが、ロンドンでは十五万円くらいもらっていました。外貨ですけれどもね。だから、一人で暮らすには、そんなに困ることはありませんでした。

当時、ロンドンも、そうとう爆撃にやられてましたが、東京ほど焼けてはいませんでした。だから、アパートはいくらでも借りられました。当時、日本にはマンション文化というものがなかったですが、ロンドンは昔からそうですから、マンションはたくさんあるし、探すことはそんなに難しくありませんでした。

当時の英国での楽しみは、何でしたか？

澁澤 僕は旅行かな。英国はなかなか違うなあと思いましたよ。スコットランドに行ったりね。

私は、商売でよく大陸 フランスとかベルギー、オランダ、ドイツ に行く機会がありましたから、色々と観てまわったりしました。でもそれは仕事が半分ですからね。楽しかったけど、早く日本に帰りたいと思ってましたよ。

でも、他の人は長く居たかったんでしょうね、ロンドンとニューヨークは、商社にとっては憧れの店なわけですよ。

そこへ行かせてもらったのは、多少えこひいきもあつたでしょうけれど おやじが大臣なんかしていましたからね 私はあまり

いたくなかったですね。家族と一緒にでないとい困りますし。それで、早く帰ってきちゃったんです。

でも、帰ってきて、今度は家族を連れてアメリカへ行きました。別の仕事を始めて。

別の仕事？

澁澤 MRAという 思想運動みたいな宗教運動みたいな 活動をやり始めましてね。それで、家族を連れてアメリカへ行って、アメリカに二、三年居ました。そこでいろいろな訓練を受けて、それから日本に帰ってきてその財団のために、だいたい仕事をしました。今でも、そのの理事をしています。

日本に帰ってきてからは、どついったことを？

澁澤 小田原に大きな建物を建てました。それが、MRAのアジアセンターという名前のものなんですけれどね、今も営業しています。それを建てるのは、私の三十代の頃の、一番大変な仕事でした。何もわからないところで建てるんですから。寄付集めをして、そこらじゅうでホラを吹いてね。「こつこつものを建てなければだめなん

MRA
道徳再武装運動。フランク・ブクマン博士は、軍備に代わる道義と精神の再武装（Moral and spirit ual Re- Arma ment）が世界の平和と繁栄への道であると提唱した。澁澤雅英氏は（財）MRAハウス代表理事を務める。

だ」とか何とか言っていて、やるわけです。

そういった中でのご苦労話がありますか？

澁澤 まあ、ああいったものが、ほとんど無の状態から生じたということとは、すごいことです。それは、やはりMRAという思想の力なんでしょうね。国際的な広がりがあったから出来たんだし、そのことを、日本のたぐさんの人たちが大事なことと思ってくれたからできたわけです。私は、そういう人たちのサポートを集めてきて、なんとか造ったということですね。地上五階、地下二階で、当時で五億円という値段でね。今だったら大変だったと思います。四、五十億かかるころ、それをゼロからスタートして造っちゃったから。

でも、できた翌年に父親が死んじゃいました。昭和三十七年にできました。三十八年に父親が亡くなりましたから。

そういう意味でも、思い出深い出来事なのですね。この五、六億円かけたもののできあがるまで、企画からどのくらいかかったのですか？

澁澤 それが、驚くべきことに一年かからなかったんじゃないかな？ 創るといふ話は、もう少し前からあったのですが、いよいよやるとなったら、あつという間にできちゃったですね。

寄付も、あつという間に……？

澁澤 ま、多少集まりましたけれど、ようするに借金で造っちゃったということですね。それを返すのが大変だった。造った後の維持にもお金はかかりますし。よくぞやってきたもんだと、自分で思う部分もあります。私ひとりやって来たわけではないんだけれども

だから、その意味で思い出が大きいといえば大きいですね。

協力してくださった方との思い出など、ありますか？

澁澤 その建物はね、ここ（国際文化会館）を真似して造ったんです。窓なんかもそっくり同じです。ここを建築された方のお一人で、吉村順三さんという方がいるのですが、その方が私を助けてくださったのです。いい建物ですよ。

今、渋谷さんは、東京にいらっしやることが多いのでしょうか？

吉村順三（よしむら・じゅんぞう）
一九〇八年生まれ。建築家。
主な作品に、皇居新宮殿（基本設計）、奈良国立博物館新館、八ヶ岳高原音楽堂などがある。
一九九七年、死去。



国際文化会館にて、澁澤さん

澁澤 東京が多いですね。小田原にはこの頃はあまり行きません。それでも、月に二回ぐらいは行きますかね。昔は小田原まで行くのに、車だと四時間以上かかりました。高速道路なんかありませんからね。唯一あつたのが横浜新道といって、吉田首相がつくった道路だけ。当時は道も悪かったし。電車で行っても、小田原まで二時間近くかかったんじゃないかな。だから、大変でしたよ。でも、今なら新幹線ですすぐですから、便利になったもんですね。

聴き手・まとめ：わぐりゆみこ

平成十七年五月十日、国際文化会館にて

小笠原六太郎さん(79) タエさん(73)



六太郎さんとタエさんの来し方

小笠原六太郎さんは、昭和二年、岩手県川井村の区界で生まれた。妻のタエさんは少々山間部に入った所の出身で、六太郎さんの六つ年少である。六太郎さんは長じて、国鉄の保線の仕事に就いた。二人は結婚後、売りに出されていた旅館を購入し、タエさんを中心に営むことに。保線仕事の手伝いに出ることもしばしばであった。四十四年目を迎える今も、元気に宿を切り盛りする。

JR山田線・区界駅は一日四本ほどのディーゼルカーが行き来するローカル線の小さな駅である。区界旅館は、そんな小駅の正面に位置する。

宿を切り盛りするのは、小笠原六太郎さん、タエさんご夫妻。六太郎さんの保線区勤務時代の話を中心にお話を伺った。とても気前のいい宿で、話を聞かせてもらう立場でありながら、ビールやワインを振る舞っていただいた。(清家)

当時の保線の様子



冬は雪に埋もれてしまふ線路



六太郎さんは、山田線で保線の仕事をされてたと聞いたのですが、どんなお仕事なのですか？

六太郎 保線は線路を守る仕事。雪が降ったら直す、線路が悪くなったら直す。汽車が歩くためには、保線が必要なんだ。寒くなると、線路が悪くなるんです。冬になると、線路が上がっちゃう。そうすると、汽車が歩けなくなるから直すんです。

冬になって、線路が冷たくなると上がるんですね？

六太郎 そう。寒くなると、線路が冷えて上がってしまうんだ。両方があればいいんだけど、片っぼだけ上がった。だから、高いところと低いところを一緒にしないと、電車が脱線しちゃう。

脱線ですか、それは緊張を強いられる仕事ですね。

六太郎 しんどいよ。寒いところやるのは。昔はレールが小さかったんですよ、三〇キロとか。一メートル当たりの重さが三〇キロなの。今はだいたい六〇キロ。今は五〇、六〇キロ。だから、当時は今の半分しかなかった。

レールが軽いと曲がりやすいというわけですね。冬場は特



に？

六太郎 そうだね。蒸気機関車だったから、今と違って重量があるから。今はレールが大きいから寒くても上がらないけどね。昔は軽かったから、ちよこつと寒かったただけでも上がっちゃって。

レールが上がり過ぎて、汽車が走れないなんてことはありましたか？

六太郎 あったねえ。そういうときは、いつもは五〇キロで走っているのを、四〇キロに落とすとかね。線路がそういう状態になると、普通に走らせられないからね。そういうときにスピードを出すと、脱線しちゃうから。

責任重大ですね。

六太郎 保線の人間は、「汽車を止める」というのは、大変なことだったんです。どんなことがあっても汽車は止めない。今はちよつと何かがあると、すぐに止めちゃうけど。当時は「汽車を止めるのは、保線の恥」っていう感じで。責任問題だったんですよ。

保線のプライドですね。ところで、ふだんはどちらに詰めて

山田線

盛岡駅（岩手県盛岡市）と石釜駅（岩手県釜石市）を結ぶJR東日本の路線。盛岡～宮古間は閉伊街道沿いを走る山越え区間で、宮古駅～釜石駅間は三陸海岸沿いを走る。一日三往復のみの、ローカル線。

山田線列車転落事故

一九四四年三月十二日。雪崩で崩壊した鉄橋に下り貨物列車（C58形式蒸気機関車と貨車五両）が突っ込み谷底へ転落、機関士一名が死亡。機関助士一名も負傷した。機関士は、瀕死の重傷を負いながらも機関助士に緊急連絡を指示し、直後に息絶えた。後に「大いなる旅路」（三国連太郎主演）として映画化された。

いらつしゃったのですか？

六太郎 詰め所があったの。（区界）駅のすぐ近くに保線の詰め所があるんです。

レールのパトロールはどのように行われるのですか？

六太郎 上の人が見るんだ。毎日。どこが悪いが見てる。当時は、盛岡と区界の間だったね。各駅に保線があったんです。だから大体、八キロくらいを十人で担当してた。

この山田線は全長約一一〇キロ、となると保線係の方は百五十人くらいいたんですね。

六太郎 各駅だからね。今はほとんど業者に頼んでるけれど。今はね、（レールの検査は）機械でやってる。大きな機械だね。

事故はありませんでしたか？

六太郎 事故、ありましたよ。シロス峠でね。あの時は何だったのかな？ 雪崩かな？ 機関車が倒されたことがあっただよ。僕が入る前だったけど脱線して、機関士が死んだのかな？ 今も、供養塔があるよ。



日本通運

一九三七年の「日本通運株式会社」に基づき発足（いわゆる国策会社）。鉄道輸送の発着両端の輸送を行う運送業者間を取りまとめる、国際通運株式会社を母体とし、これに同業種や政府などの出資を得て創立された。

旅館を始められたのはいつですか？

六太郎 ここは、昭和三十六年かな？ 戦後、開拓の人がけつこう入って、このあたりも賑わっていたんですよ。

タエ 分校もできたりして。旅館はその前からやっていたんですけどね。

小笠原さんがこの旅館を始める前に、旅館をやっていたらっしゃる方がいたということですね。

タエ この前の敷地で。今は駐車場だけだ。

六太郎 前の人は「マル通」やっていたんだよ。

マル通？

六太郎 日本通運の貨物ね。先代は、旅館と国鉄貨物を経営していた。それが昭和三〇年代に入って、貨物がなくなっただ。それで、息子さんが盛岡に引っ越すからってということで、ここが空いたもんだから。

それまで、「ご商売は？」

タエ なーんも。商売なんかやったことなかったから、大変だっ

たあ。よくやってきたもんだ。

今年で四十四年になりますね。

タエ 四十四年！ うわー、よく働いたわ。

これまでどんな方が泊まりましたか？

タエ 工事の人がいたね。そうだねえ、みんな優しい人だ。ホント、いろんな人がいた。工事の人で、入れ墨を入れている人とかね。

でも、チンピラは怖いけど、ホントのヤクザは優しくったね（笑）。入れ墨を見せられて「びっくりしたでしょ？」とか言われるけど、こっちはなんもわからないもん。だから恐くなかった。私らはぜんぜん関係ないけど、中ではいろいろケンカとかね、あったよ。いろんな人を泊めてきたもんだ。

盛岡は車だと、三〇分くらいでしょうか。汽車で行かれることはありますか？

タエ いないね（笑）。

一番最近乗ったのはいつですか？

タエ ないねええ。

岩泉線

茂市駅（岩手県宮古市）と岩泉駅（下閉伊郡岩泉町）を結び、東北日本の鉄道路線。岩泉線〇キロポスト特定地方交通線第二次廃止対象線区に選ばれていたが、代替道路未整備を理由に、廃止には至らなかった。

「猿を乗せるつもりか」発言
帝国議会で、「こんな所に鉄道を敷いて、首相は山猿でも乗せるつもりか」と、揶揄された原敬首相（当時）。「鉄道規則を読んで戴ければわかりませんが、猿は乗せないことになっております」と答弁した。

六太郎 今は、どこの家にも車があるからね。昭和四十年頃は、まだ車を持っている人が少なかったけど。

山田線は赤字ローカル線ですが、岩泉線もありますね。

六太郎 岩泉線は道路がないから。だから、バスが通れない。バスが通れば廃止になるんでしょうが。開通した当初から廃止、廃止つてね（笑）

タエ 開通した時から、廃止だなんてね（笑）。

議会で「猿を乗せるつもりか」と言われた山田線ですが、実際は物流の大動脈でした。宮古からの魚も運んだんでしょうねえ。

六太郎 貨物は魚も積んどったけど、木材が多かったかね。あと粘土。昔、区界の一つ手前の浅内というところは、開通になっていなかったんだけど、粘土がとれるって。

へえ、粘土が。

六太郎 資源を運ぶために造ったんだ。昭和四十年、五十年になって、出なくなっただけど、そういう関係があったから、山田線廃止という問題が出てきたんだね。鉄鉱石も出たんだよ、それを釜石まで

戦時中は運んだ。戦後になってなくなったけど。ここも、鉱山から駅まで運ぶリフトがあった。今だったら、車で運ぶんだろうけど。
じゃあ、駅で積み替えて？

六太郎 そう、そこから釜石に持って行って精錬するわけですね。重要だったんですよ。木材にしてもね。東京方面さ、持ってた。木材は貴重なもんだった。三十五年くらいまでは盛んだったんだね。

聴き手・まとめ 清家ゆうほ

平成十七年六月三日、岩手県川井村「区界駅前旅館」にて

寺倉清之さん(92) とよ子さん(86)



寺倉清之さんの来し方

大正二年、東京都新宿区大久保にあった「河合靴店」に生まれる。学業のかたわら、靴の製造・修理・販売を手伝う。三十二歳で招集、終戦後の捕虜生活後復員。靴の修理を請け負いながら、豪徳寺で「平和堂靴店」を開く。

「ご主人の清之さんは、若い頃から、注文靴や修理の修行をし、中野でご商売をしていましたが、終戦後すぐ、小田急線豪徳寺駅近くに「平和堂靴店」の看板をかがげられました。豪徳寺駅三度の改築と商店街の繁栄もずーと見てきたそのお店も、息子夫婦にまかせ、今は、奥様のとよ子さんと二人で、のんびりと隠居生活。清之さんが、丹精こめて育てた庭の草花を、とよ子さんが絵にするというすてきなご夫婦にお話をうかがいました。清之さんが現役のばりばりの頃、「平和堂のご主人の選んでくれた靴は、履きやすいんだよね」「見てくれより、履き心地にこだわる、頑固者なんだよね」という噂もあったことも内緒で書いておきましょう。(副枝)

寺倉という姓は、めずらしいですよ。

清之 私の祖父の代まで、岐阜県の養老というところで、庄屋をやっていたそうです。寺倉庄屋といひまして、郷土史にも載っているそうです。

ですが、山の中ですから発展がないということ、おじいさんは東京に出てきたそうです。

世帯をもって子供ができ、その子供の将来を考えた時、これからの新しい時代は、洋服や靴が必要になってくるからと、祖父は親父を靴職人のところに奉公に出したそうです。それで、靴職人となって、私のお袋の河合家に養子に入ったんです。

そして、新大久保と大久保の間の、今の職安通りで靴屋を始めたそうです。それが、明治四十四年だったそうです。

その河合家は、もともと靴屋さんだったんですか。

清之 いいえ、新宿の花園町で、石屋をやっていたんです。家の土台石に、漬物石みたいの使っていましたよね、そういう石を扱っていたんだそうです。聞くところによると、そういう石は今の東京

養老(やうらう) 岐阜県養老郡養老町。岐阜県の南西に位置し、三重県に隣接する町。聖武天皇が養老御巡幸のとき、四日間の駐留に騎馬隊が馬糧をこの滝付近の山から供したことに由来する。まぐさの滝がある。

戸山ハイツ

都営戸山ハイツ。現在の戸山ハイツは高度成長期に建替えられたものであるが、元々は米軍の兵舎払い下げ資材によって建てられた、戦後初の大規模な木造の都営住宅であった。

戸山が原

現在の新宿区大久保。当時は、戸山が原が陸軍の敷地であった。

駅の前あたりにごろごろあったそうなんです。荷車で、その石を拾って来て。

建物が建つにつれ、その石はよく売れたそうです。石材店として卸問屋になって、職人も十五、六人はいましたかね。

新しく始められた靴店は、当時、どんな様子だったんでしょう。清之 当時の大久保には、靴屋は一軒もなく、新宿にも一軒しかなかったそうですよ。

当時は、靴は注文してつくるものでしたから、お得意さんも徐々に増えて、栄えたそうです。

では、その大久保で、子ども時代を送られたのですか。

清之 そうです。小学校は、大久保で通っていましたから。

今、戸山ハイツが建っているところは、当時、戸山が原、といって、陸軍の射撃場だったんです。三角山と言って、五十メートルぐらいの土を三角に盛って、市ヶ谷の方から鉄砲で打つんですよ。鉄砲の弾が、山に命中して、薬莖が下に落ちるんです。

射撃訓練の休みの日は、その三角山のとっぺんに、赤い旗が立つ

藤田嗣治(ふじた・つくはる)

一九三〇年から第二次世界大戦までの間、アメリカ、メキシコ、フランスなど各国を渡り、個展を開催。戦中は日本で従軍画家として活躍した。
横綱「太刀山」(よこづな・たちやま)
第二十二代横綱。大関昇進後は、八年間でわずか五敗。56連勝の記録をもつ。

凌雲閣(りょううんかく)

通称・浅草十二階。高さ52m、日本初のエレベーターが設置された建物。多くの作家が、十二階からの眺めのとりこになった。一九三三年(大正十二年)関東大震災で倒壊、爆破された。

んです。本当は入ってはいけないんですが、子供だから、向こうもたいして警戒もしなかったんでしょうね。薬莖集めの競争なんかしていたんですよ。友だち同士で、何個集めたかの、形がいいの、悪いのと自慢してましたね。

ご近所には、洋画家の藤田嗣治、横綱「太刀山」のお家がありましたね。でっかい横綱でね、その息子とは、遊びましたね。

当時、東京で遊びに行くというと、上野、浅草、鶴見の花月園、そんなところでしょうかね。花月園には、大山すべりといって、大きな滑り台のようなものがありました。お米が入っていた麻袋を敷いて、滑るんです。

大正十二年の八月三十日、夏休みも終わりなもので、母親とおじさん、私の兄弟四人の六人で、まず上野へ行き、西郷さんを見たいんですが、動物園には行かなかったですね。

次に浅草に行き、凌雲閣に入りました。二階でおでんを食べたんですが、おいしかったですね。三階からだったかな、エレベータで八階まで上って、そこからは階段を利用して十二階の展望台まで行

きました。

「あっちが大久保のほうだ」なんて話を聞いて、降りてきて、今度は花屋敷へ行ったんです、その花屋敷に、虎がいたんです。虎が子供を産んだというので、五匹いましたね。猫みたいで可愛かったですね。観音様をお参りして、仲見世に行きました。おもちゃ屋さんがたくさんあるんですよ。「あれがいい」だの、「これがいい」だの散々迷って、何か買ってもらうって。

それからまた、上野に戻って、今のアメ横の近くの「だるま」という大きなすき焼き屋に入って、「ご飯を食べました。

帰りは、万世橋から新宿までは、電車で。そこから大久保までは、歩いて帰ってきました。

今のコマ劇場のあたりは、当時、大村の原といって、殿様の屋敷跡地だったらしいですね。大きな原っぱでしたよ。そこに、府立中学がありました。その原っぱでは、よく兵隊ごっこをして遊びました。

また、今の都庁の先に十二社じゅうにそつがありますね。その池に、めだか

をとりにいきましたね。

大久保から十二社まで、ずいぶん距離があるのではないですか？

清之 そうですね。でも、今みたいに建てこんでもいませんし、車もそんなにいなかったでしょうから、ちょっとした遠出ぐらいだったんでしょね。

しかし、家に帰ると、母親に、叱られて叱られて、「どうしてそんなに遠くまで行くの！」と怒られましたね。また、当時は、道路が舗装されていなくて、

雨が降ると、水溜りができてしまっただね。子供は、その中に、ちやぶちやぶ入るでしょう。すると、「カッパが出るから、水溜りに入っちゃいかん」って言われたもんですよ。今思うとよく遊びました。

勉強なんかそっこのけですよ。

関東大震災は、大久保で遇われたんですか。

清之 九月一日は、土曜日だったんでしょうかね。母が、妹を負ぶって銀行へ行く、と言ったんです。

関東大震災

大正十二年九月一日の午前十一時五八分に伊豆大島、相模湾を震源として発生した直下型の大地震による災害。関東地方の広い範囲に大きな被害をもたらした。

いつもは、私たち子供も付いていったんですよ。帰りに、必ず銀行の近くにあった、「みよしの」というおしるこ屋に寄ったもんですから。それがめあてでね。

でも、その日は「時間がないから」と、連れて行ってくれなかったんです。泣く泣く留守番ですよ。

残った兄弟とおばあちゃんと昼食をとっていた時、ぐらぐらっと地震がきた。屋根瓦が全部落ちましたよ。近くに、大久保変電所を建設している場所があつて、鉄骨などの資材が置いてある原っぱがあつて、そこに避難していたんです。

やがて、新宿の方から、人がぞろぞろ来るんです。母親も、新宿の銀行に出かけましたから、帰ってくるのを今か今かと見ていたんです。

でも、夕方になつても帰ってこない。やがて、中野で商売をしていた父が、歩いて帰ってきたんです。事情を聞いた父親が、新宿に探しにいきました。

レンガ造りの銀行は潰れてしまっていたそうです。父親は、その



現状を見て、なすすべもなく呆然としていたら、丁度そこへ四十人くらいの兵隊が通りかかったんです。下町の方へ救出に行く途中だったそうですが。その隊長が父親を知っていて、訳を聞くと、その兵隊たちを動員して、母親を掘り出してくれたそうです。

三歳の妹と母親は、圧死でした。

父親は、荷車に母親と妹を乗せて、大久保に戻ってきたのが、夜中の二時か三時だったかと思います。起こされたんですけれど、眠かったんでしょうね、よく見なかったように思います。

次の日、埋葬するため、下落合の火葬場へ行ったら、そこも、地震で釜が壊れたとかで、火葬に出来ず、やむなく土葬にしたそうです。

大久保は、震災の時の火災は、なかったんですか。

清之 幸い、なかったですね。家の瓦はほとんどが落ちましたけれど、家が潰れたというのは、周りではなかったですね。少し前から、大久保では商売にならなくなって、父親は、中野で靴屋をやっていたんです。毎日、通っていたんですね。



父と兄弟と（写真左が清之さん。震災の翌年）

私が、十五、六歳の頃だったでしょうか、全員で中野に引っ越して、新井町の住人になったんです。私も青年期をむかえ、一生懸命商売を手伝いました。学校へ行っていたんですけど、店が忙しいから、手伝わなければならない。修理もありますからね。そのうち、学校どころではなくなり、辞めて、商売の方にうちこんでしまったんです。

そして、当時あった、「青年団」という組織にはいりました。

商店街の組織としてあったんですか。

清之 いえ、誰でも入れたんです。

とよ子 昔はね、何処にでもあったんですよ。

私は、平塚出身なんですけれど、「女子青年団」といつてね。その青年団が、いろいろと行事をしたんです。青年団みたいのがあると、若い人たちが集るでしょう、だから遊んでいる人なんかいませんでしたよ。

清之 悪いことをする人もいないでしょうね。まずできないですよ。

私が所属していたのは、大日本連合青年団 東京市連合青年団 中

野区青年団新井町第十四分団という名称で、青年団生活をしましたね。

女子の方は、最初「処女会」といつていたんですが、そのうち男子に準じて「女子青年団」になりました。全国組織ですよ。

公に認められていたので、どこかで「火事だ」といつとすつ飛んで行って、火事場でおまわりさんのお手伝いですよ、交通整理のね。えばってやっていましたね。

その町の青年団の中に、体育部と修養部というのがあって、私は体育部に所属したんです。その体育部が、新井町に薬師公園という大きな公園があったんですが、そこで毎朝ラジオ体操をしたんです。中野区の薬師公園でのラジオ体操は、人が多く集ると評判だったんです。

そこで、中野区から私を含む四人が選ばれ、麹町の番町小学校、数寄屋橋の泰明小学校などでNHKのラジオ体操の江木先生の指導を十四、五回受けたでしょうかね。指導を受けた私たちは、戦争が始ると、各町会の指導部になって、体位向上ということで、町会で体



新井薬師公園でのラジオ体操（昭和十七年）

操をやるんですね。でも皆さん、なかなか出席してくれないんですよ。でも、一生懸命やりましたね。

しかし、だんだん戦争がひどくなってきた、体操どころじゃない。そのうち、竹やり訓練だの、消火訓練に駆り出されたりしましたからね。青年団の副団長として一生懸命でした。何たって、「欲しがりません、勝つまでは」でしたから。お国のために尽くしたつもりだったんですがね。

奥様とは？

清之 新宿で靴屋をやっている叔父さんの連れ合いの姪っ子なんです。

その叔母さんが、「べっぴんがいるから」ということで、昭和十八年の二月十日に、中野区の日本閣で式をあげました。

とよ子 当時ね、日本閣の人に「モンペで式を挙げてください」と言われたんですよ。

でもね、「それだけは勘弁して下さい、写真を写す時だけでもいいから」と許してもらったんです。

(結婚式の写真を見ながら) あー、きれいですね。

とよ子 私が着ているのは、全部自分で縫ったんですよ。丸帯も。だから、着たかったんですよ。

私は、お裁縫をしていたので、袴以外は全部縫いましたね。

清之 その時分は、お祝い事があると、お酒の配給が二升あるんですが、それだけでは足りません。幸いというか、商売していましたが、闇でお酒を調達して、皆さんにたっぷり飲んでもらいました。

とよ子 新婚旅行は、伊東に行っただんです、お米持参でしたよ。お米を持っていかないと旅館には泊れなかったんです。

叔父さん、叔母さんが、新婚旅行を進めてくれて、行ったんですが、ありがたかったですね。

当時、戦時色は？

とよ子 昭和十八年の四月に、アメリカの飛行機が一機飛んできたんですよ。それでみんなびっくりして、「こりゃ大変だ」というわけですよ。

国民徴用令

昭和十四年、国家総動員法に基づいて公布・施行された勅令。戦時における労働力確保のため、強制的に国民を徴用することを目的とした。

清之「アメリカの飛行機は一機も入れない」って威張っていたんですから。西大久保のあたりが空襲にあったことは聞きました。

昭和十九年の十月に、企業統制令が公布され、商売が出来なくなつたんです。私もそれに従って、靴屋の看板を下ろしたんです。

その当時、徴用令というのがありまして、立川の日立航空に徴用されたんです。

私は、商人ですから勤めた経験がないでしょ、だから嫌で嫌で大きな工場でしたよ。

大きな旋盤の前に立たされて震えましたね。そんなに大きな機械なんて見たこともなかったですから。

お店も閉めて、徴用されていたとなると、生活の糧はどうしていたんですか。

清之 徴用されていた工場から、給与が出たんですが、雀の涙ほどで足りませんでしたね。だから、持っていた品物を闇で売り食っていました。それに、私は靴職人でしょ、修理を頼まれるんですよ。おおっぴらにはできませんから。

とよ子 徴用で通っていて、帰ってきてから頼まれた靴を修理するんですよ。遠いから、朝四時に出かけて、帰ってくるのが夜中の十二時。それから修理ですからね。

ある日ね、立川駅の駅長さんから「ご主人が倒れたから迎えにきてくれ」って電話があつたんですよ。びっくりして、息子をおぶつて飛んでいきましたよ。そうしたら、駅長室で、蒲団を敷いてもらつて、ぐったりと横になっていましたよ。

一時間ぐらい寝かせてもらつて、少し元気になったので一緒に帰ってきました。そんなこともありましたよ。

昭和二十年二月の二十日に主人は出征したんですが、その十日前ぐらいに、息子が風邪をひいて、入院したんです。食べるものはないし、肺炎にでもなつたら大変ですしね。

当時は灯火管制といって、夜、電気がつけられなかったんです。今の劇場の足元灯がありますよね、あのくらいの明るさしかないんです。ほんとに、不自由でしたね。

それに、息子の風邪がなかなか治らないんです。看護婦さんに「何



戦時中の靴店の様子。背景に「兵隊サンアリガトウ」の文字

かい薬はないですか」と尋ねると、「今は、兵隊さんの所に送ってしまったのでないんです」と言われました。

それでも、「何とかしましょう」とある日、注射を打ってくださいったんです。それから、どんどん良くなりました。ペニリンだったのかしら　と今もって何の薬かはわからないのですけれどね

出征、ということとは、「赤紙」が来たんですか。

「赤紙」
旧日本軍の召集令状の俗称。

清之　そうです。臨時召集ということでしたね。
とよ子　もつ年（三十二歳）だから、召集令状は来ないと思っていますよ。

灯火管制の中、朝早くまだ暗いうちに出征していきました。この人が召集された後、徴用で行っていた立川の工場が爆撃されたんですよ。

ある日、軍事郵便が届きましてね、これから船で何処かへ行くと書いてあるんですが、行先は書いてないんですね。「島でなければいいがな」と思いましたよ。島は、食料がないと聞いていましたのですね。

清之　私は、千葉県の佐倉にあった、自動車隊に召集されたんです。ある日の夜、軍用列車に乗って博多へ行き、そこから船に乗ったんですね。甲板に、竹の長いのが積んであるんですね。孟宗竹ですね、やや太い。

どうしてこんなところにあるのかな、戦地で使うのかな、と思っていましたら、ほか沈くったときの浮き袋がわりなんだそうです。人数分の浮き袋なんか持っていなかったからでしょう。いざという時には、それに掴まれということなんです。

スマトラ島に行くという兵隊仲間の噂があったんですが、実際は、釜山に着きました。それで、今度は陸路で満州国の奉天に着いたんです。

更に、中国の山の中に行くという噂がまた流れたんです。私は自動車隊に属してはいたんですが、靴屋でしたから、靴の修理をよくしていました。

その時、兵隊の位は？

清之　こんべい糖が一つ。二等兵でした。

三ヶ月が経ち、検査に合格すると、二つになって一等兵になるんです。

皆、私より若いんですから。三十面さげて、敬礼しなくてはいけないのは、辛かったですね。

とよ子 こちらも大変でしたね、食料がなくて。

私の実家に疎開しようと、息子を負ぶって、東京駅に行ったんですけれど、汽車に乗れないんです。ものすごく混んでいて……。中の人が、「負ぶっていたら乗れないから降ろしなさい、窓から入れてあげるから」と。そう言われて、やっと乗ったんですけれど、辻堂あたりで止まったんですよ。空襲警報が出たんですね。

「汽車から降りろ」と言われて、周りの麦畑にうつ伏せになって隠れました。アメリカの飛行機が来て、撃ってくるんですが、操縦士の顔が見えるんです。私は、撃たれる覚悟しましたけれど、飛び過ぎていきましたね。息子が泣き叫ぶので、すぐに汽車の中に入りました。

一時間くらい停車していたんでしょうか、再び走り出して、平塚に着いたら、父が迎えに来ていて「よく帰って来てくれた」と、涙ぼろぼろ泣いていました。

清之 私は、戦地へ行っているんですよ、山の中とはいえ。でも、鉄砲の弾一つ飛ばなかったんです。

でも、女房たちは国内にいて機銃掃射に狙われ、戦地に行った私が鉄砲の音一つ聞かなかった……。これも運命なんじゃないかね。

とよ子 あの時は、本当に怖かった！

終戦の知らせは、どこで知りましたか。

清之 その戦地で、私は足を車にぶつけられたんですよ。バックシて来た車だったのか、それは定かではないのですが。

それで足を痛めて、平坦病院へ入院していたんです。入院している間に、自分の部隊は、「石家荘」というところに行ってしまったんですね。しばらくして、入院していた三人と、鉄道に乗って、自分の部隊を追いかけたんです。二日ぐらいかかりましたね。

そして、部隊に着いたら、「日本、負けちゃったぞ」と。

そこで初めて知りましたね。そこから、捕虜生活が始まりました。

石家荘（せつかそうづ）

中華人民共和国河北省の省都。

持っていた鉄砲やら刀は、全部向こうの兵隊に渡して、丸腰になって、「たーく」という町に、日本の兵隊や日本人は集められました。そこで、大きな穴を掘って、在留邦人の家財道具や着物を投げ込み、燃やしたんです。二十四時間燃えていましたね。

さあー、捕虜生活ですよ。

大和煮(やまとに)
牛肉などを、醤油に砂糖・シヨ
ウガなどを加えて甘辛く煮た
もの。

まずは、食べものですよね。ご飯はほとんど食べられませんでした。私は、牛の大和煮という缶詰を十五個位持っていたんです。ですから毎日それを食べていました。

しまいには、見ただけでのどが詰るようでしたけれど、がまんして食べていました。

とよ子 内地でも大変な食糧難でしたよ。主人は、息子が二歳の時帰ってきたんですけれど、その間、お芋とわずかばかりの配給の魚と限りある食料で、よく病気になるように、育ってくれたと感謝の気持で一杯です。

(写真を見ながら)古い写真がよくとってありましたね。

(関東大震災の写真)これなんか、とても貴重な写真ですね。

とよ子 その写真はね、私の弟が避難させておいてくれたんですよ。姉さん一人で大変でしょうからと、荷物をいくつか持っていったんです。

その中にアルバムも入れたんです。主人が帰ってきて、写真がなくなっていたら悲しむだろうと思ひまして。重たかったですけどね。中野の自宅は、丸焼けになってしまいました。私がお嫁に来た時に持ってきた道具、タンスや長持ちなどは、父が伊勢丹で当時七千円ぐらいで用意してくれたんです。その時、祖母が「こんな時代だから、この道具はすぐ使わないで、とりあえずは今あるものを使ったら」と言ったので、手つかずで置いておいたんです。それが、そっくりそのまま焼けてしまったんですよ。

清之 私が戦地から帰ってきて、行くところがないでしょう、中野は焼けてしまったし。

それで、女房の実家の平塚に復員したんです。

そこは、農家だったんですね。義父が「ここなら空家がある。買ってあげるから、そこに住んで会社にも入ったら」と言われたんで

す。でも私は、徴用の時、勤め人を経験して、どうしても勤まらないと思っただし、東京へ出たかったこともあって、断わったんです。

とよ子 この世田谷線の近くに住んでいた主人の叔母が、借家を持っていてから、「何時でも出てきていいよ」と言ってくれたんです。それで、親子三人で、叔母さんが持っていた貸家の一部屋に入ったのが、この豪徳寺に来た始まりです。

その時の私たちの引越しの荷物は、風呂敷包二つ、それがすべてでした。何もなかったですね。

私たちは、行くところがありませんから、その叔母さんの貸家の六畳一間で生活を始めたんですが、よそのお家ですよ、苦労しましたね。お水を汲むのも人がいない時、煮炊き用のコンロも、壊れたのを直して。庭先でするんです。

南京袋（なんきんぶくろ）
黄麻で織った袋。穀物などを入れる。

清之 燃料がなくてね。南京袋でかばんを作って、朝暗いうちに、上町方向に歩くんですよ。道路に、ゴム靴の古いのや、木の端切れが落ちていてしょ、それを拾って燃料にするんです。

とよ子 ゴミ集めですよ。

清之 毎朝、ずいぶんやりましたね。

私は中野に長くいましたから、知り合いも大勢いますし、中野で商売をしたいと思って、毎日お芋を持って、家を探しに行っただんです。

中野は、私たちが住んでいた新井薬師の近所は焼けたんですけれど、駅の周辺は、焼けなかったんです。ですから、残っていたお店は、戦後、景気がいいんですよ。繁盛していましたね。

そんな具合ですから、空き店なんかないんですよ。それでも一週間ぐらい、中野駅周辺をほっぼっ探しましたね。

とよ子 お芋のお弁当持ってね。

清之 当時、外食なんかなかなか出来ませんから、お弁当を持っていくんですよ。メリケン粉の中にお芋の刻んだのと重曹を入れて、混ぜて電気で焼くんですよ。「電気パン」です。おいしかったですよ。とよ子 ですけどね、重曹が入るでしょ。時間が経つとパンが緑色に変わっちゃうんですよ。

清之 当時は、おいしかったですね。

電気パン

昭和二十年ごろから戦後の食料難の時代に、粉をといて塩味で作ったパン。板切れで木箱を作り、ブリキやトタン板を箱の両脇に入れ、蓋をして電気を通す。これで、蒸しパンが焼けたという。当時、口ゴミで伝わったようだ。

よそのお家でお水をもらって、電気パンを食べて、店を探すんですけど、駅周辺のお店は、みんな焼けぶとっちゃってるんですね。こっちは、お金もない、すっからかんですよ。

とよ子 しばらくしてから、その中野の焼けたところを見に行っただんですが、一面焼け野原なんです。

でも、駅周辺は、普通に家が建っているでしょ。びっくりしましたね。

それでも、たまに、防空壕に焼けトタンを乗せて、女の人が一人暮っていたりするのを見ると、涙がぼろぼろでましたね。

自宅のあった焼け跡に立ってみると、タンスのあった場所の灰の上に、ちゃんと取っ手が落ちているんですよ。あらためて涙がぼろぼろ……、泣いてしまいました。

母が鼈甲の櫛を五本持たせてくれたんです、「大事にしなさい」と言っただけ。それも見事に焼けてしまいましたね。お皿などは、穴を掘って埋めたりして、助かったんですけれど。

でも、取っ手が灰の上にあったのには、驚きましたね。

それでも、毎日、皆さんが靴の修理を持ってきてくださるんですね。だから、一生懸命やりました。

そのうち、豪徳寺駅付近の空地の地主さんに、「お店を出すのなら、お好きなところお貸ししますよ。そのかわり長くやってください」という突然の申し出を頂いて、嬉しかったですね。

お芋を持って、中野に探しに行ったこともあるから、その夜は、泣いて喜びました。

ちょうどその場所は、爆撃などで火災が発生した時に延焼しないようにということと、昭和十九年に強制疎開させられたと聞いています。

清之 そうなんです。建っていた家が、取り壊しになって、戦後戻って来なかったんでしょうね。ずっと先まで草ぼうぼうでしたよ。

とよ子 「どこでもいいですから、どの大きさでもいいですから、そして、お金はお使いになっただけからいただきますから」とおっしゃるんです。もう、びっくりでした。

何処にしようかしらと、迷っていましたが、主人が「駅の近くが

(家屋) 強制疎開

防火帯を作って延焼防止の為に
行われたものだが、戦時下
では、長年住み慣れた家も「指
令」という名で取り壊されな
ければならなかった。

いいよ」ということで、そこを借りて、靴屋「平和堂」を開店したんです。

「平和堂」としたのは？」

清之 戦争も終って、これからは平和な時代が来る、ということので「平和堂」にしたんです。

とよ子 昔は、よく働きましたよ。お勤めの人たちも帰ってくる時間が遅かったんですよ。ですから、お店も十二時過ぎに閉めたんです。主婦ですから、朝が早いでしょう、眠かったですね、毎日が。でもね、その頃、よく売れましてね、年末なんか三百人くらいのお客様でこった返していました。

清之 まったく、嘘のようですよ。皆さまによく買って頂いてね。

本当に忙しかったですね。使用人も八人位いた時もありました。小さい店ですけども。

とよ子 泥棒にも何回も入られましたね。お金ではなくて、品物を持って行っちゃうんですよ。

私たちは二階に寝ていましたから、「下で、音がするんだけれど」

「ねずみだよ」「そつお」って。

朝起きて一回に下りてみると、ゼーンぶ空っぽになって。

でも、本当にここまで来るのに随分苦労しました。実家の両親にも心配をかけましたし。いろいろありましたけど、これからも二人でやっていきたいと思えます。

聴き手・まとめ 副枝志保子

平成十七年四月二十二日、世田谷区豪徳寺にて

石川テルさん(89)



石川テル(いしかわ・てる)さんの来し方
 大正四年五月十日、栃木県宇都宮市に生まれた。
 宇都宮市内の県立女学校を中退、浅草の叔母のところへ寄宿しながら東京駅前丸ビル内の文房具店「文祥堂」に勤める。
 結婚後、豪徳寺で暮らし、今日を迎えている。

母である石川テルは、今年九十歳。足腰が弱ったとはいえ、まだまだ意気軒高。専業主婦として、夫に仕えて六十四年、主婦の鏡(？)、とても真似はできません。その母に、娘時代のこと、戦争のこと等あらためて話を聞きました。幸いなことに、我が家は二世帯住宅、折りにふれ、話は聞いていましたが、順序だてての話は、初めてでした。特に、母の長兄が浅草で、三月十日の爆撃で一家全滅した話は、何度聞いても衝撃を受けます。

三年前に沖縄、昨年は広島と慰霊の旅を楽しみにし、次は長崎をと言っている、まだまだ元気な母を支えつつ、時には支えられての今日です。(副枝)

子どもの頃からの話を聞かせて

戸祭

栃木県宇都宮市にある。市の中心部よりやや西部に位置し、国道一一九号線(日光街道)が南北に走る。

石川 宇都宮市内の戸祭というところで生れたの。家が貧しくてね、子沢山だったから、私が四歳くらいの時、母の実家の旅館屋に預けられたのね。おばあさんと叔母さん、母のお姉さんね、それに養子の叔父さん、みんな良い人たちだったわね。

体は弱かったんだけど、めはしがきく、というのかよく動いたの
 で可愛がられたわね。今思うとよく働いたわ。

朝は五時に起きて、お客さんのお茶を用意して、階段を上ったり降りたり、髪を結って、急いで朝ご飯を食べて。そうこうしている間に、お客さんのお膳を片付けて、かばんを肩にかけながら走って学校へ。途中の土手で宿題をするの、先生が通りすぎりに「何してる！」って。「宿題です！」って返すの。それでも級長していたのよ。

小学校四年生のとき、叔父さんが、雛人形と雪洞を買ってくれたの。嬉しくてね。雛人形といっても、女の人一人で「竹小町」って書いてあったの。「雪洞や 雛を飾りて 桃の花」「雪洞や、昔を偲ぶ竹小町」だったかな、二つ作ってお客さんに見せたら、ずいぶん誉

められたわね。

子どもの頃、将来、何になりたいと思った？

石川 学校の先生になりたくて、高等科に行くつもりでしたら、旅館に泊っていたお客さんが、「女学校へ行けば、二年早く先生になれるから女学校に行ったほうがいい」と言ってくれたの。でも、勉強なんかろくろくしていないじゃない。だから、あきらめ半分で試験を受けに行ったんだけど、結果はなんと合格。びっくりしたわね。今でも憶えている試験問題があるの。「栃木県で一番大きな川の名は？」という問題だったんだけど、私は「田川」って書いたの。旅館の横を流れていた、その川しか知らなかったのよ。

それから、女学校生活が始ったのね。

石川 旅館の仕事を手伝いながら、女学校に通っていたの。女学校では、「葉桜の君」って言われてね、最初は嬉しくてね、桜がついているし素敵だな、と思ったら、何のことはない、歯が少し出ているから。桜は、花が咲いてから葉が出てくるでしょ。でも、葉桜は、葉が先に出てから花が咲くのね。歯（葉）が鼻（花）より先に、と

いうこと。そんなでもないのにな。

他には、みんなの前で落語を披露したりしたのが楽しかったわね。そうこうしているうちに、叔母さんが死んじゃったの。もう悲しかったわ。おばあさんと叔父さんだけでは、旅館をやっていくには大変、ということになって、しばらくして、叔父さんが再婚したの。でも、このお嫁さんが、子ども嫌いで、私の居場所がなくなつて。仕方なく、女学校も中退。で、世話する人があつて、奉公に行ったの。

先生の夢、やぶれたり、だわね。

石川 そうなの。学校は行きたかったけれど、一人立ちもしなければならず、感傷にひたつていられなかったわね。

その奉公先で、小さな子に「テル、テル」と呼ばれ、腹が立って「あなたに呼び捨てにされるすじあいじゃない」って、ひっぱたいて飛び出しちゃったの。

東京に行きたくてもお金もないし、仕方なく旅館にいる叔父さんのところに帰ったの。そして、叔父さんの知り合いが、南千住にあった紡績工場を紹介してくれて、そこで働き始めたの。

どのくらいいたかしら……。ある日、兄が来て、「姉が危篤だ」って呼びに来たので、二人で宇都宮に帰ったのね。

姉はやせ細って、私の手をとって、「おテル、おテル、行かないで」って。とってももひもじい思いをしていたのね。

私は、いそいそでお米を買って、ご飯を炊いて食べさせて、ひどいところに寝ていたから、貯金を下して蒲団を買って、そこに寝かせてね。

この姉は、小さい頃、はしかの高熱で、知恵遅れになってしまったの。小学校でね、この姉が授業中、「おテル、名前が書けない」って呼びに来るの、そうすると先生が、「行ってやれ」って。何回行ったことか。姉が、小学校を卒業した時は、ほっとしたわね。

私の母は、若くして死んでしまって、父が再婚したので、姉は、継母に世話されていたんだけど、今で言う、児童虐待よね。充分に食べさせて貰えなかったの。私も兄も知らなくてね。姉は、死の直前、私の手握りながら、継母にされた仕打ちを話し出してね。側で聞いていた叔父さんが、「お雪、もついいから、わかったから」っ

て。堪らなくなっただんでしょね。

姉が亡くなり、後片付けもすんで、東京に戻り、今度は浅草で世帯を持っていた長兄の世話で、浅草の電気館で働き始めたの。

最初は切符もぎをやり、そのうち二階の案内係に。そこで、ある男性と知り合ったの。その人は、私の仕事が終るのを毎日外で待っていてくれてね、二人でおしゃべりしながら 何をしゃべっただんでしょね 清住町まで歩いて、私の下宿先の叔母さんの家まで送ってくれていたの。

そして、その人はそこから浦和まで帰るの。

ある日、その人の友人が来て、彼が病気だから見舞ってやってくれと云われ、初めて、その人の浦和の家に行ったの。立派なお家だったわね。私が帰るとき、その人が「電車賃だから」って、私の手にぎゅーとお金を握らせてくれたの。あの頃、私は貧乏だったから。

暫くして、友人が「亡くなった」という知らせを持ってきたの。彼、肺結核だったの。私もずいぶん泣いたわね。隅田川のほとりで泣いたの。手紙もたくさん貰っただけけど、泣きながら全部燃やした



友人とテル（左）

電気館

明治三十六年に、日本最初の常設映画館として誕生。現在は、賃貸マンションと店舗に姿を変えている。



結婚当時の写真

の。

それから、長兄の友人から、電気館での私の働きぶりをみて、丸ビルに出店していた文房具屋さん「文祥堂」で働かないか、と言われて、文祥堂に移ったの。

お父さんと知り合ったのは？

石川 さつき言った、肺結核で亡くなった人の友だちだったの。

結婚した頃、この辺（豪徳寺）はどうだったの。

石川 田舎だったわねー。家もまばらにしかなくて、畑ばかりで、ほんとに田舎だったわよ。

結婚した時、野田の叔母さんも同居していたのね。その人は、池田公爵家の奥女中をしていたから、何でもできるでしょ。きちんとしたきびしい人だったわね。

私にお琴を教えてくれたんだけど、音痴でしょ、ひくことは出来るんだけど、自分で調律ができないのね。とうとう叔母さん、さじ投げたの、「あんたはだめね」って。

やがて戦争が始まったんでしょ。戦争中は？

石川 そつ、大変な時代だったわね。

東京は、爆撃が激しくなるからと、荷物を宇都宮に疎開させたの、次兄のところだね。やがて、その宇都宮も危ないっていうんで、家の荷物と兄のところの荷物を、さらに田舎に疎開させようと玄関に積んでおいた、その晩に空襲にあって焼けてしまったのよ。でも、荷物に保険がかけてあったので、助かったわ。あの時の保険料、現金はほんとうに助かったわ。私たちは、家の前の関根さんの庭に作った防空壕や、お隣の林さんの所の防空壕にはいったんだけど、お父さんは、絶対に入らなかつたの。

飛んでいるアメリカの飛行機を窓から見て、「きれいだなー、敵ながらアッパレだなー」って。私は、はらはらしたわよ。

また、町会で消化訓練のバケツリレーとか、竹やり訓練があったんだけど、お父さんは、絶対に参加しないのよ。一世帯に一人は出なければならぬので、いつも私が出ていたの。訓練のあと少しおしゃべりして家に帰るでしょ、すると、「すぐに帰ってこない、人にこどもを預けて」って怒るの。

バケツリレー

火災の消火のために、水のはいったバケツを順々に手渡して火元まで送ること。戦時中、隣組単位で実施されていた。

竹やり訓練

主婦が中心となって行われた軍事訓練。学校校庭で、現役軍人が教官としてつき、竹やりの構え方や突き方などの形を練習した。

さらに、紙に「おさなごを われに預けて 遊びほけたる 妻憎
きかな」なんて書いて置いてあるじゃない、しゃくにさわったわね。
遊んでいたわけではないのに。

よく、憶えているわねー。

石川 だって、腹がたって、くやしくて憶えているわよ。「妻憎きか
な」ですもの。

お父さんは、兵隊にならなかったのね。

石川 赤紙ではなく、青紙が来たの。青紙は、教育召集といってね。
でも、途中で赤紙に変更になることがこの頃は多かったそうよ。昭
和十九年の二月だったと思うけど、徴兵検査を受けるため、一緒に、
千葉県習志野まで行ったんだから。結局不合格で返されたんだけ
れど、嬉しかったわね。

私が思わず嬉しそうになると、お父さんが、「しっ、嘗門を出るま
では、静かに」って。徴兵検査が終わったのが、夜の九時過ぎ。雪
は降ってくるし、最終電車が遅れて、豪徳寺まで帰れないだろうと
いうことで、浅草のおばさんのところへ行くことになったの。それ

で、着いたのが真夜中。そこでやっと落ち着いたわね。

「お父さんが戦争に行ったらどうしよう。あの性格だから、絶対
生きて帰ってこれないだろうな」などと考えていたから、「不合格」
と聞いたときの喜びは、わかるでしょ？ 合格した人は、家族の待
合室にきて、私服を持って帰ってもらうの、でもね、喜んでいた人
なんていなかったわね。皆、沈んでいたわ。足が悪い人まで、招集
されていたのよ。不合格になったと思うけど。

不合格になると、役所へ行って、その旨の報告をし、徴兵検査の
不合格の証明書を提出しなければならぬのね。お父さんは、再び
お役所勤めでしょ。食料も乏しくなって、お弁当には苦労したわ。
配給だけでは、足りなくて、いつもひもじい思いをしていたような
気がするわね。

あなた（聴き手）がお腹にいるときは、妊婦ということで配給物
が優先されたことはあったけれど。

あなたが生れた時、お父さんは「女ですか」ってがっかりしたよ
うな言い方だったから、お産婆さんから怒られてね。「上に三人も



石川齊（いしかわ・ひとし）
石川テルの夫、聞き手副枝の
父。明治四十四年〜平成十三
年 東京生まれ。内務省企画
院勤務。

男の子がいて」って。

大きくなってからは、「女の子がいてよかった!」とよく言っていたけれどね。

あなたは赤ん坊で、私の背中まで、よく眠っていてくれて、ほんとに助かったわ。防空壕に入れても、寝ていてくれたものね。

その時から、親孝行だったんだ! それで、玉音放送は聞いたの?

石川 どこで聞いたんだらう……? 自宅で聞いた、という記憶はないんだけど……。

「戦争が終わった」「負けた」と聞いたけど、実感はなかったわね。ただ、その夜から、電気の傘に黒い布をかけなくてよかったのがとても嬉しかったわね。

明るかったわねえ。戦争中なんか、ちょっと明るくしていると、町会の人に来て、「敵機にみつかるではないか」と怒鳴られたもの。でもね、戦争が終わってからのの方が、食糧難で大変だった。お芋の買い出しによくいったわね。

農家へいくでしょ、先ず最初に「何をもってきたの?」って聞かれるの。そこで、着物だとか、帯だとか見せてから売ってくれるの。もちろん、お芋の料金は現金で払うのよ。私の着物も帯も、二つ折りにできる三味線も、ヴァイオリンもみーんな食べちゃったわ。

いつだったかしら、お父さんの役所が焼けたの。確か、落雷だったと思うけど。大蔵省も焼けたんじゃないかなかったかしら。その時、業者からの火事見舞いなんですよ、果物の缶詰を買ってきたの。嬉しかったわ。子どもたちも大喜び、美味しかったわね。

戦争が終わったのが、昭和二十年の八月十五日でしょ。碩哉(長男)は、まだ疎開先において、いつ帰ってくるのかわからなかったの。近所の人の様子を見て、疎開している新潟県の白根に行ったんだけど、その人いわく、みんなやせてがりだから、早く連れ戻した方がいって言うものだから、新潟へ行ったの。

切符はすぐ買ったの。

石川 なかなか買えないのよ。

当時、父が鬼怒川の大きな旅館の帳付け番頭をしていて、その父

が、知り合いのついでで買い、それを送ってくれたのね。

そして、疎開先へ行ったら、ほんと、骨と皮だけ。先生たちは、まるまるして、当時はそう思ってしまったのね、憎らしかったわよ。碩哉に、「一緒に帰る？」と言ったら、「皆と居る」というので、あきらめて帰ろうとしたら、「やっぱり帰る」というので連れて帰ったわ。途中、宇都宮に寄った時、旅館の叔父さんが碩哉を見てびっくりして、「かわいそうだから、ここへ置いていけ、東京より食べ物はあるんだから」って。でも、本人は帰ると言うので帰ってきたの。お米を持たせてくれて、嬉しかったわね。頭にしらみはいるし、やせてしまつて、ほんとにかわいそうだったわね。

今思つても、大変な時代をよくここまでできたなと思う時があるわね。今また、徴兵制やら戦争なんて言ったら、私は、反対のデモに先頭たつてやるわ。



家族で（中央が聴き手）

聴き手・まとめ 副枝志保子（語り手の長女）

平成十七年四月二十八日、世田谷区豪徳寺にて

逸見芳子さん(84)



逸見芳子さんの来し方

大正十年一月二十三日、静岡県静岡市の西草深町に生まれた。
静岡市内にある日本赤十字看護学校を昭和十五年に卒業。すぐに招集を受け、従軍看護婦として広島で病院船に勤務。三度の従軍を経て、終戦を迎えた。後、世田谷区内の病院に勤務していました。

逸見さんは、いつも着物で、背筋をしゃんと伸ばして歩いている、豪徳寺でも有名な方です。シャキシャキとした物言いは、江戸っ子のようにです。ご近所の方々から最も頼りにされているのは逸見さんかもしれません。

逸見さんの一人娘の薫さんと遊んでいた私は、当時から働く女性のまぶしさのようなものを感じていました。その逸見さんの職業であった看護婦のお話を聞きました。従軍看護婦としての過酷な体験など、驚く話ばかり、看護婦は天職と言いつける逸見さんをうらやましくも思います。戦後六十年、節目の年とばかりに、戦友会や看護婦会などでお忙しそうでもありました。(副枝)

天長節

第二次大戦前における、天皇の誕生日の呼び方。四大節の一。

一八七〇年(明治三年)、九つの祝日のうち天長節を制定。
一九四八年(昭和二十三年)に、天皇誕生日と改称した。

紀元節

二月十一日。四大節の一。
一八七二年(明治五年)、日本書紀伝承による神武天皇即位の日を紀元の始まりとして制定した祝日。一九四八年(昭和二十三年)に廃止された。

お生まれは？

逸見 大正十年一月二十三日に、静岡市の西草深町で生まれました。士族だったので、屋敷は駿府城の外堀の近くにあり、徳川の直参旗本でした。

姉からは「禄高は高かった」と聞きました。でも、私の記憶にあるのは、貧乏でしたね。天長節とか紀元節の時は、学校で式があるのね。皆は、セーラー服を着て出席するんだけど、私は、着物なの。そんなことでいじめられたこともあったわね。ほんと、貧乏だったのよ。

父が亡くなって、母が働いていたんだけど、弟には、父の恩給が出るの、長男だから、十八歳までね。それで学校行けたのね。

看護婦になりたいということ、日赤にはいられたんですか。逸見 看護婦になりたいなんて、全然思わなかったの。昭和十二年三月に、静岡市の高等女学校を卒業したんですけどね、進学なんて考えてなかった。家は、貧乏だったしね。

当時は、学校卒業したら、お裁縫とかお花を習って、お嫁に行く、

日赤日本赤十字社の略称。昭和二十七年に制定された日本赤十字法によって設立された特殊法人。日本における赤十字活動を行う唯一の団体。



日赤の入学式

というのが普通だったでしょ。

なのに担任が、友だちと一緒に「日赤を受けてもらんなさい」って言うもんだから、受けたんですよ。その友だちは、日赤をよく知っていたんでしょうけれど、私は目的もなく受けたのね。そしたら受かったちゃったの、友だちも一緒に。

合格すると、身元調査があるの。おまわりさんが、私のことを聞きに家に来たのね。母に、私が何か悪いことしたんじゃないかって怒られたわよ。

私は、母にも言わずに受験したもんだから、事情を説明したら、母もびっくり。

つまり、私は、受かったから入学しただけなの。だから、入学してからが大変だったわよ、厳しくて、厳しくて。

寮生活が始ったんですね。

逸見 養成ということだから、授業料はタダ、洋服は貸与品、お小遣いが月三円もらえるの。それを貯めてね。お作法の時間に穿く、白い靴下が欲しかったから。

それからやっと、三年生ぐらいになってから、レコードを買って、友だちと講堂の隅で聴いたわ。

それまでは怖かったのよ、寄宿舎の中は。言葉使いは、「はい」とおそれいます」の二つだけ。五、六人が一部屋なのね。部屋の中は、私服でもいいんだけど、お手洗いへ行くにも白衣を着ていかなければいけないかったの。帽子はとって、ちゃんと机の上に置いておくんですけどね。

それがある夜、寝巻きに着替えてから、そのままでお手洗いに行っちゃったの。怒られてね、立たされたの。

またある日ね、私が顔にクリームをつけたのね。そしたら、それが白すぎるって注意されたのよ。夜、食事が終わってから召集がかかって、勤務から帰ってきた上級生の前に並ぶのね。お小言よ。こういうクリームをつけてはいけない、言葉使いが悪い、私たちの前を歩いた、敬礼が悪いとかね。

白いものを見ると、十五度の敬礼。だから、カーテンに敬礼なんかしちゃってね。病院だから、白い物がいっぱいあるでしょ。それ



でも夢中なんだから。

授業を受けに講堂に行くのに、病室の前を通らないと行けないのね。すると、先輩がいるでしょ、皆上級生なんだから、どたどた歩いちやいけないのよ。さっさと小走りに歩いて、後ろに来たら、「おそれいます」って言うてから追いつくんだから。

白衣なんかもね、全部チェックされてね。下着は、シュミーズなんかだめなのよ、見えるから、白い木綿の下着なの。白衣の裾は、床から二十五センチ。並んだ時、一直線になるようにね。一週間目くらいにね、部屋の皆で、蒲団かぶって、「帰りたいね」って、わーわー泣いたわよ。

授業のほかに、課外活動としてお作法の時間があったて、お茶、お花、お裁縫もしましたよ。

三年生になると、日赤病院も軍の患者さんが多くなり、一般の私たちは外来治療だけで、入院できなくなつたのね。

私たちも、代用看護婦に任せられて、軍から給料が出るようになったの。三千円。嬉しかったわね。



日赤二年生の頃



看護婦免状

卒業は、昭和十五年三月だったわ。

どこかの病院に勤めたのですか。

逸見 私たちはね、「日赤卒業十五年間は、身上に何等移動を生ずるとも、国家有事に際して、速やかに本社の召集に応じ、軍人の召集令状が来れば、戦地に赴かなければならない」ということが義務付けられていたの。だから、一旦緩急あれば、命を捧げる教育を受けてきたわけ。私たちは、修身という授業があつて、親孝行とか、お国のため尽くすとかは、あたりまえでしたからね。

私はね、卒業と同時に、二二五救護班として広島に召集されたの。広島に着いて初めて病院船に勤務ということがわかつたの。

病院船は、船が丸ごと病院なんですか。

逸見 そうなの。私たちの時はね、ドイツの戦利品の真っ黒い船を改良して、一万トン近い大きな船で、「吉野丸」といったの。その病院船は、広島に居を置き、月二回ぐらい、患者収容輸送のため、南京、青島、基隆、大連、台湾や朝鮮、満州にも行ったのよ。目的地に着くでしょ、少し時間ができると、「戦跡見学」っていつてね、



卒業（昭和十五年三月）



第一回召集

脚気
ビタミンB1欠乏による栄養失調症の一。末梢神経が冒されて、足がしびれたり、むくんだりする。

照宮様
昭和天皇の第一皇女。東久邇成子様のこと。

軍のトラックに乗って、お寺や街など見学ができたの。万里の長城なんかも行きましたよ。

病院船には長くいらしたんですか？

逸見 一年半ぐらいかしら。

船に長くいると、脚気かっけの人が増えるの。土を踏まないし、ビタミン不足になるのね。私たちは、交代があるからそんなに長くはないの。だけど、船がドックに入ると、一、二日から十日間くらいお休みになるの。静岡の家に帰ったり、そうでない時は、お茶にお花、三味線、長唄、日舞をやりましたよ。切符で、優先的に習うことができるの。忙しかったわよ。

ある日ね、お茶を習っていることなんだけど、照宮様が広島にお見えになった時、お茶席を同席したこともあったの。当時の一流の先生にいろいろと習うことが出来たのも、軍に所属していたことと、その時分はまだ、そんなことするゆとりがあったからなんでしょうね。

召集解除の時は凱旋で、駅には、白の割烹着を来て「愛国」のた

すきをかけた婦人会の人たちが、小旗をふって出向えてくれてね。私たちは、紺の制服を着て日赤支部に向うの。

解除されて、次は、どうなさったんですか。

逸見 しばらくは、日赤病院の病室の主任しながら休むの。病院船に較べればだんぜん楽でしょ。二回目の召集が十六年の二月に、二九五救護班として、下田の湊にある海軍病院の内科に勤務したの。昔、療養所があったところじゃないかしら。

海軍はね、半舷上陸といって、半分ずつ休むの。海があるから救難訓練なんかもしたのよ。勿論、日赤の授業でも泳ぎの訓練はあったのよ。

ここには一年と数ヶ月勤務して、二回目は百七十四救護班として、南方派遣第八方面軍の九十四兵站病院ということでもまた広島に召集されたの。「どこへ行くんですか」って聴いたら、ラバウルだって言っじゃない。若い子なんかは、青くなっちゃって、意気消沈している子もいるし。その子たちの気持を奮い立たせようと、船の中で、いろいろと余興なんかやったり、笑わせようとしたのよ。こっちだっ



二回目の召集（海軍病院）

ラバウル
パプア・ニューギニアのニュー
ブリテン島北東端にある港湾
都市。太平洋戦争中、日本海
軍航空隊の基地があった。

て悲しいんだけどね、そんなとこ行くんだもの。

へいたん
兵站病院って何ですか？ また、どんな環境なんですか？

逸見 前線のための病院で、前線より少し後方にあるの。ラバウルには、六ヶ月くらいいたんじゃないかしら。”ニッパハウス”と言ってね、床は高くベニア板で囲われて、窓は棒を突き出してささえるの。毛布二枚を敷き布団、掛け布団にして、蚊帳を吊って寝るの。ヤモリが出てね。朝起きると、そのヤモリが白い腹を上にして死んでいるんだけど、最初はなかなか眠れなかったわよ。

食事は、赤い細長い米のご飯で、ぼそぼそして、これも慣れるのに時間がかかったわね。おかずは、海で捕れた平たい小さな魚のから揚げか、鰯の缶詰ね。「午睡」と云って必ず昼寝をしなければいけないの。将校が見回りにくるんだから。でもね、海は透きとおっていて、赤や青のきれいな色のした魚が泳いでいて、そのむこうには、ラバウル富士が見えて、そんなの見ていると、心が和んだわね。夜、南十字星が大きくきらめくのを見ると、暑さも忘れるひと時よね。

でもね、私はその時伝染病棟勤務だったの。赤痢やチブスで

三度目の召集(ラバウル)



しよ。熱はあるし、下痢はひどいの。栄養失調と重症患者ばかりだったから、やることはいっぱいあるんだけど、看護婦は少ないでしょ、ズツクのベッドのお尻のあたりを切って、その下に、一斗樽を置いて、もう垂れ流しよ。消毒なんかもどうやってやったのか……。

あんまり大勢でね。下痢患者には水分補給しなければいけないでしょ。ベッドの頭上に長く紐を渡して、そこに、リングルをかけて、患者さんの腿に針を打っていくんだけど、内地にいるときみたいに、温湯で湿布して液が吸収されやすくしてあげられないのよ。ブス、ブス、機械的にさしていくのよ。

一列終って戻ってみると、最初の人の腿が膨れ上がっているのよ。でもね、何もしてあげられないの、忙しすぎて考えてなんかいられないの、走りまわっているんだから。それでも、打ってもらえる人はまだ幸せなの。処置もできずに亡くなっていく人がいるんだから。

最前線の病院で働いている時は、「自分たちの身は、どうやって守るんですか？」

逸見 私たちは軍に属しているから、すべて軍の命令通り動くの。避難の時は、衛生兵は男だから、担送患者は衛生兵が、看護婦は、どっぼ（独歩）といって、自力で歩ける人を連れて行くの。でもなんせ患者の方が多いでしょ。それは大変だったわよ。

そこでも数ヶ月経つと、砲弾が病舎の上を通ったり、近くで重い砲弾の音がしだして、戦争が激しくなってきたの。照明弾が落とされて。始めは知らないから「きれいね」なんて眺めてたの。でも、流れ弾が飛んでくるようになると、患者さんたちを壕に退避させなきゃいけないって。私たちが、退避させた後をみるんだけど、逃げ遅れた兵隊さんに亡くなる人が出てくる。でも、「悲しい」という思いはなくて、「死」に慣れっこになってしまふのね……。忙しいこともあって、感情がなくなってしまうの。

戦況が厳しくなってきましたよね。

逸見 十九年の十月には、マニラの南第十二陸軍病院での勤務になったの。リンガル湾上空から飛行機の編隊が突然現れたかと思うと、急降下。辺り一面が爆弾の炸裂音、恐怖ね。

マニラ湾で、学徒動員の人たちが乗った船が撃沈されて、担架で担ぎこまれた人たちで、ベットはいっぱい。廊下にぎっしりと、足の踏み場もないくらいにたくさんの人が担ぎ込まれてね。やけどで苦しんでいる人たちの叫び声や、水を欲しがっている人たちの声を聞きながら、タンク油を塗ってね。悪臭の中、夜を徹して看病しても、追いつかないのよ。私たちも辛かったわね。

偵察機は次々と通り過ぎるでしょ。地平線の彼方から何やら見えたとかと思うと、空に広がって爆音が響き渡り、弾が炸裂するの。生きた心地はしないわね。まず患者さんたちを壕に入れなければと思うんだけど、瞬間、しゃがんでしまうの。

夜は、診察室の窓から明かりが漏れないように、レントゲンで使った、黒い紙を貼って診察するの。

当時は、白衣では目立つので、国防色の布で、頭巾と上着とズボンを作って、それを着たのよ。私は、お裁縫ができたので、勤務が終わるとミシンを踏んで、何枚も作ったのよ。お裁縫、できない人が多かったから。



病院船との別れ（写真は第一回召集当時）

二十年の一月には、バギオ第二分院に配属になり、バギオ第七十四兵站病院で勤務。ここは、避暑地なのよ。

病院の本部には、うちの静岡班の混成の看護婦が勤務していたの。私たちは、山上勤務。ここは飢えた人たちばかり。一日一食の配給じゃ、取り合いになるのよね。

空襲はひどくなるばかりで、本部が爆撃されて、静岡班が全員死亡してしまったの。

激しくなる空襲を避けるため、さらに山の上に避難する事になり、行軍が始ったの。勿論、患者さんも連れて行くのよ、でも、途中でどんどん亡くなってしまふの。

兵隊さんが履く靴下、軍足っていうのね、袋状でつまさきのところが縫い合わさっているだけなの。片方にお米を、もう片方に乾パンを入れて、両方を肩にかけて、毛布一枚と合羽と水筒と飯盒、結構重たい荷物をしょって、一列になってひたすら歩くの。飢えと眠気で、半分寝ながら、ザク、ザクという靴音だけ聞いて、必死でついていくだけ。体のバランスが崩れば、谷底に転落しちゃうのよ。

「小休止」っていう声がかかると、その場にどさっと座るんだけど、座ったところが「柔らかいな」と思うと、死体の上だったりね。でも、何の考えもわかなくなっちゃうのね。

この行軍途中で、私はデング熱にかかって四十度の熱が続いたの。その時は、車に乗せられ、次の地点で休んだんだけど、治ったらまた行軍よ。夜昼なく進むの。前の人との距離は五十センチ、遅れないうつについていくだけ。患者さんの人数も減るばかり、人のことなんか何にも考えられないの。

銃弾、暑さ、飢えに追いかけられ、足だけが動いているのよ。雨は、冷たく寒い。途中、小枝で暖をとりながら、山を越え、白い道を黙々と歩くのよ。

「バーン」という音がしたかと思うと、「自決！」と誰かが叫ぶ。そんな声を横目にみながら、ただただ、歩くだけ。途中、置き去りにされた兵隊さんたちがいてね、「看護婦さーん」なんて声をかけてくるんだけど、それも聞えないふりしたりして。鬼よね、看護婦じゃなくなるの。

デング熱
ネッタイシマカなどの蚊に
よって媒介されるデングウイ
ルスが病原体の感染症。

まだまだ、行軍は続くんですか。

逸見 そつなのよ。ひたすら逃避行ね。

「イゴロツト」といって、その土地の人たちのことなんだけど、彼らの去った小屋を見つけて、中に足を踏み入れるんだけど、その途端、黒ゴマのようなものが、体に飛びかかってくる。蚤の集団なの。急いで逃げて、たたき落すんだけど、脚半にも入ってくるの。栄養失調の私たちにも飛びかかるんだから、蚤たちもそうとう飢えていたのよね。

その小屋を、ひとまずの住まいにすることになったの。まず、最初にすることはトイレ作り。シャベルで、またげるぐらいの幅で細長く、人が入れるぐらいの深さに掘って、周りは草で囲ってね。土間に草を敷いて、そこが寝床よ。

そしたら今度は、水と食糧探し。カモテというお芋があるんだけど、その畑には茎と葉っぱしか残っていないの。あぎみの根っこが、ごぼうの味がして、一本を八人で食べたのよ。

絶壁を必死の思いで降りて、水場へ行って、そこで水筒に水を入れたり、水浴や洗濯をするの。それで、岩場に洗濯物を広げて干す。そこには、数ヶ月いたかしら？ この頃、お塩が欲しくて、九十キロも山道を跳ぶようにして降りて、人（日本兵）を探し、最後まで身につけていた時計、衣類と交換。それでも一握りの塩よ。それを皆で、大事に、大事に食べたの。水と塩で命をつないだようなものよ。山を見廻りに行くと、あちこちで、兵隊さんが死んでいるの。その人たちの背囊をもらって、一人一人に渡すのね。

私は、手榴弾を隠し持っていたの。いざという時の為だね。

ある時、ピラが舞い落ちてきたの。拾ってみると、一枚は、横浜の交差点で、黒人兵が交通整理している写真。もう一枚は、電灯の下で、夫婦と子ども二人がちゃぶ台を囲んで食事をしている絵だったかしらね。「終戦になったから、出てきなさい」なんて書いてあったんだけど、私たちは終戦なんて考えた事もなかったから、「なんだろうね」「おかしいね」なんて言いながら歩いてた。でも、今思つくと、終戦の知らせだったのよね。当時は、そんなこと知らずに、ひたすら逃避行していたんだから。

手榴弾

手で投げる小型の爆弾。手投げ弾。

てりゅうだん。

絵葉書に描かれたカラ
ン捕虜収容所



二十年の九月になって、十五分後に整列して下山するようという伝令が来たの。そこで初めて、「負けたんだ」ということを知ったの。

私たちは、制服に着替え、持っていた手榴弾を山小屋に置いて下山したの。各所に米兵が銃を持って立っていたわね。着いた所は、広い野原に、幕舎が数限りなく並んでいた。そこが、「カランの捕虜収容所」。男女別々に分けられて、ズックのベットと毛布二枚、それと着るものも与えられたのね。

私は元気だったから、テントの外でうろろろしていたら、軍医さんにトントンと肩をたたかれて、「ここには患者さんがいっぱいいるから、看護婦さんを集めてくれないか」と。それで、元気な人を集めて診療のお手伝いをしていたの。

食事は、一日一回。並んで、ビスケットにオートミールをもらうの。マカロニにマヨネーズをかけたものもあったわね。

収容所の女性は、看護婦さんたちですか。

逸見 私たちだけではないのよ。子供もいたのよ。

その収容所に入った時、看護婦たちは一ヶ所に集められたのね。あっちこちらから来た人たちで、百人近くいたんでしょね。

そこには長いこといたんですか。

逸見 重症患者さんから帰るの。だから、私たちは後回し。患者さんの世話があるからね。「帰る」と決まった人は喜んで、それはそれは大騒ぎだったわよ。

私が招集解除になったのは、二十年十二月二十六日。

貨車に乗って港まで行くんだけど、途中、現地の人たちが、貨車めがけて石を投げるの。「バカヤロー」って。ところどころに米兵がいるんだけど、おかまいなしにね。怖かったわ。貨車から出られないんですもの。

そして、海防船「伊丹」に乗ったの。船には大勢が乗っているからギューギュー詰。私は船酔いで辛かったわ。

広島の大竹栈橋に上陸して、検疫。シャワーを浴びて、DDTの白い粉末を全身にかけて消毒。それで、そこに二日間滞在。

広島は、原爆で焼け野原でしょう、びっくりしたわよ。ドームの

DDT

有機塩素化合物の殺虫剤の一つ。ノミやシラミを駆除するため、噴霧器で子供に頭からかけていた。

近くに日赤があったから、あそこはよく行ったのよ。それがあんなになっちゃったでしょ。広島がこんなだから、静岡はどうなっているのか心配になってね。でも、聞いても誰もわからないの。

静岡行きの切符と千円、全員同額をもらって帰郷するんだけど、静岡に着いてびっくり、駅前は見渡す限り焼け野原じゃない。駅の南口近くにあった私の家も、すっかり焼けてしまったのね。家族が何処にいるのかもわからないので、すぐ東京の姉のところに行ったら、兄が海軍工廠の徴用で、豊川にすることを聞いたの。それで、三十日の雪の降る夜、やっとそこ豊川のその家に着いたの。

やっと着いて、家に入ったら、知らない人が出てくるじゃない。兄嫁だったのね。母も最初は、私だっことがわからなかったそうよ。すっかり面がわりしていたのね。やせこけて、栄養失調で髪の毛も薄くなっていたのよ。

少しは、落着かれましたね。ご結婚は？

逸見 昭和二十一年でした。海軍病院に勤務している時に、上司の世話で、お見合いしたの。私の親が、この非常時に結婚なんてって

反対したのね。ごちゃごちゃしたから、私は面倒になっちゃって、召集に応じちゃったでしょ。

そしたら、逸見（夫）も召集されていて、広島で偶然に遇ったの。私は、これから南方へ。逸見も海軍の主計でしたから、船で何処かへ。当時は何処へ行くかわからないでしょ。極秘でしたからね。でもね、二人とも生きて帰ってこられた。

それで新婚生活が始ったのね。私たちは離れに住んで、母屋には叔母と女中さんがいたの。逸見が会社に出かけるとき、私が「行ってらっしゃい」って送り出そうとしたら、母屋の玄関で、叔母と女中さんが三つ指ついて待っているじゃない、びっくりよ。

私は、看護婦をしているとき両手がふさがっていたら、足でポンなんてやってきたから、それからが大変だったわよ。

子どもができて、ここは田舎で医者もないから、どうしようかと思案している時、逸見が勤めていた、神保町の交差点近くにあった自動車修理工場の寮に入ったの。

その頃から、逸見が風邪でもないのに微熱が続いて、水道橋にあ

る「結核予防研究所」で診てもらったの。そしたら「すぐに入院しなさい」と言われて、途方にくれたわ。

そしたら、神保町で、ばったり捕虜収容所でお手伝いした軍医さんに会ったのよ。びっくりよね。その軍医さんは徳島の人で、「今、日大病院に研修に来ている」って言うじゃない。事情を話したら、その軍医さんがお米を調達してくれて、それを持って日大病院の教授に頼んでくれたの。まさかこんな東京で会うなんて、ありがたかったわね。

こんな偶然があったりして、私はずいぶん助けってもらったりしたのよね。

結核は、治癒まで時間がかかると聞いてますが。

逸見 そう、退院してもすぐに働けないし、もちろん、そんな状態ではないので、しばらくは療養しなければならぬでしょ。

逸見が入院している時、私たちが新婚生活を始めた豪徳寺で同居していた伯母が見舞いに来てくれて、その時、自分の面倒を見て欲しいと逸見に頼んだのね 後から知ったんですけどね 逸見も

会社を辞めて、豪徳寺に戻って、療養生活が始ったんですけど、なにしろ、生活していかなければならぬでしょ。乳飲み子がいたので、近くの都立梅ヶ丘病院で、私は働き始めたの。

後年、その伯母は脳軟化で徘徊が始まって、小田急線の線路上に座り込んで電車を止めてしまい、警察からお叱りを受けたり、夜中に家を抜け出して、ご近所の方に連れてこられたり、大変でしたよ。八十八歳で亡くなりました。

逸見の父は、福島に住んでいたんですが、胃癌で余命わずかと言われ、こちらにひきとり、看取ることができました。

もう一人の叔母もね、老人ホームに入っていたんですけど、そのホームから私が呼ばれてね。行ってみたら、叔母はいつもと同じに見えたんですけど、よくおしゃべりをするのね、私はもっぱら聞き役。後に急変して、亡くなったの。ホームでは分かっていたんですけど。この叔母はね、若くして、夫も子どもも亡くし、親族には縁の薄い人でしたわ。

逸見は、病気を抱えながらも、体調のいいときは、働いたりもし



たんですけれど、家で療養している時間が多くなったの。口数の少ない人でしたね。夫は、娘の花嫁姿を楽しみにしていたんですけれど、「もう我慢しなくていいか」と言って、結婚式の前日に亡くなったの。六十三歳。

それから、二十年後の一昨年（平成十五年）、足立区の警察から、四十年間音信不通だった逸見の弟のことで電話が来て、救急病院に入院しているから来てくれて。半年付き添い、この弟も看取ったの。こうして私は、夫はもちろんのこと、親戚の老人たちも看取ることができたのね。長男の嫁だった私は、家族の面倒は当然だったし、看護婦だったことも事も、天職だったと感謝しているわ。

支那事変の時は、お国から金七十円のご褒美を貰い、今は、私を助けてくださった方々から、元気というご褒美をもらっているの。まだまだ、この体を使って、ご恩返しをしたいと思っているのよ。

聴き手・まとめ 副枝志保子

平成十七年四月二十八日、世田谷区豪徳寺にて

和田敏子さん(83)



和田敏子さんの来し方

和田敏子さんは、神楽坂のホン書き旅館「和可菜」の女将さんである。お生まれは、大正十一年十月十日。今年で八十三歳になるが、まだまだ現役である。生家は、牛乳の製造販売を手掛けていた。姉は女優・木暮実千代。彼女は売りに出されている旅館を購入、その切り盛りを引き受けたのが妹の敏子さんであった。

JR飯田橋駅から十五分ほど。料亭や旅館が立ち並ぶ石畳の通りは、都心とは思えない静けさだ。その一角に瀟洒な門構えの建物がある。築五十五年の旅館「和可菜」である。

「和可菜」は、野坂昭如、山田洋次、宮崎駿……、数多くの作家、脚本家に愛されてきた「ホン書き旅館」だ。和田敏子さんがここにやって来たのは、昭和二十九年五月。女将として「和可菜」を切り盛りしてきた、和田さんの半生をうかがった。(わぐり)

まずは、お生まれからお伺いできますか？

和田 私は大正十一年十月十日生まれ。ご先祖は徳川様の旗本だったんです。

私の家が牛乳の製造や販売を請け負う仕事を始めたのは、明治時代になってから。外国人が大勢日本に入ってきた時期に牛乳の需要が増えたんですよ。

それまで、日本の牛乳は高温で殺菌していたのですが、高温殺菌では栄養分が死んでしまうのね。それに外国は低温殺菌が主流でしょ。そこで私の父が低温殺菌をするための機械を外国から仕入れてきたの。当時、東京15区全てにその機械を入れたっていうからすごいわよ。

本社(?)は^{したやまち}下谷町にあっただけど、そのときは従業員が約百人。

牧場もあつたし、番頭だけでも十人もいた。ホント、大きな牛乳屋だったんだから。その中で子供は私一人だけ。あと周りはみーんな大人でしょ。いっしょに遊ぶ人が家の中になくなって、寂しい思いをしていたの。当時、私の家は、凸版印刷の隣にあって。家が大きいのが、



和田牛乳のポスター

下谷町(したやまち)
商人の町として栄え、江戸文化の中心となった町。現在の
上野付近。

紀元二六〇〇年（二十歳）



東条英樹（とうじょう・ひでき）
開戦時の総理大臣。太平洋戦争を指導した。

阿南惟幾（あなみ・これちか）
終戦時の陸軍大臣。

杉山大将（すぎやま・はじめ）
杉山元帥。開戦時の参謀総長。

幼い私にとって自慢でした。

関東大震災で被災したのは、牛乳事業が軌道に乗り始めて「さあこれから」というとき。家や設備も全部なくなっちゃった。

被災してから私たち家族は杉並に引っ越したんだけど、父が亡くなったのは、そのころ。なんとか食べていかなくちやいけなうので、母はジンギスカン料理のお店を始めたの。「成吉思荘^{ジンギス荘}」という名前だった。

いよいよ戦争が激しくなるといふときだったんだけど、当時は他にジンギスカンを食べられるお店なんて無かったから、大繁盛。政財界の人たちがいっぱい来た。東条英樹、阿南惟幾^{あなみこれちか}、杉山大将……。みんなりっぱな車でやって来てね。店は大賑わい。でも、その分、子供だった私は、一人取り残されてよけいに寂しくなったわ。

学校を出たのが、紀元節二千六百年。戦争が身近に迫ってきた時代だった。私たち若い女は、女子挺身隊に徴収され、軍のために働いたの。私は、日本橋の軍需会社の工場で、事務の仕事をしたわ。楽しい思い出もあったの。工場で働いている時のこと。今みたい

荻窪の和田邸



にタイムカードがないから、出社すると、名簿に印鑑を押して、出社の記録にするの。あるとき「わざわざ朝押さなくても、帰りに押して帰ればいいんだ」って思いついてね。最初は、私一人で行ってたんだけど、そのうちみんなの印鑑も預かってばーっと押しちゃって……。笑。でも結局、見つかって、叱られたの。私、昔からそういういたずらを考えるのが大好きだったから。

当時の娯楽というと、何かありましたか？

和田 今も思い出すが、日本橋の三越の本店にりっぱなパイプオルガンがあつて、軍歌を演奏していてね。工場の昼休みにこれを聴きに行くのだけが楽しみだったの。戦争が激しくなると、娯楽なんてそんなになかったから。

そのうち、東京は、毎晩、空襲警報が鳴るようになってね。B29が焼夷弾をバンバン落としていった。空襲警報が鳴ると、サーチライトに照らされた敵の飛行機があちこちから来るの見える……。何度も、もうダメだと思つたわ。

空襲は夜の十一時頃から明け方まで続く。だからみんな二、三時間



寝て、またすぐに起きて働かなくちゃいけない。東京中の人がそんな生活をしていた。子供心にも、この戦争は負けると思っていたの。私の家に焼夷弾を落とされたときは、私がすぐに布団をかぶせたり、水をかけたりして火を消しとめた。ああいうのは、迷ってちゃ絶対にダメ。風呂の水でも、布団でも何でもいいから、あるものをガバツとかぶせなきゃ。そうやって私たち女は家を守った。男たちはみんな戦地に行っているから、家を守るのは女の役目だったの。危険ですよ。

和田　そう、ホントに危険なのよ。でも逆に空襲の時にまごついてると、火が回ってしまつて逆に家も命も失ってしまうの。だからすぐに消し止めないと。軍事教練で油脂は水をかけると危ないつて教えられたけど、でも落ちてきてすぐだったら大丈夫だったわよ。

戦争中に結婚しようと思った人がいてね。いよいよ結婚しようということになつたんだけど、その彼は戦死しちゃった。

それでもその後、恋愛をして、失恋もして、色々あつて、よく考えずに結婚した。当時の新婚生活もは、モノがなくて大変だったわ。

結婚（昭和二十二年五月）



京都への新婚旅行に行くのも一苦労。八百屋からトラックを借りて、荷台に置いたビールケースの上にお婿さんとお嫁さんが座つて、家から中野駅まで行つたのよ。駅に着いたら、お米を背負つて、汽車に窓から入つて席を取る。

死にそうなぐらいに汽車が混んでるから、京都に向かう前に築地の旅館に一泊したの。でも出てきたのは、水だけ。枕の上に水がぼーんを置かれていてね、それっきり。あまりにもわびしくて泣きましたよ。ホント、何も無い時代でしたから。

新婚生活が始まつたのですね。

和田　義理の父は、膨大な土地を持っていた人だった。だから私たち夫婦はその土地でお百姓をやることになつて、毎日必死。だつて、私、野良仕事なんかしたことなかったから。ようやく二年目なつて、やっとみんなについていけるようになって。

ある時、主人が、私に野良仕事なんかさせるのは可哀相だつて義理の父に言つてくれたの。そしたら、お父さんが怒つて、主人を殴つたのよ。私、男性が殴られているのを初めて見たので、びっくり



姉・木暮実千代

しちゃって。主人を助けなきゃと、とっさにお風呂のふたでお父さんを殴ったの。そしたら、お父さんがひっくりかえっちゃって……（笑）。

その隙に主人と家出しちゃった。それから、よその家の離れを借りて生活を始めた。でも、やっぱり生活は大変だったわね。生活に必要なものは全部配給でしょう。

新聞だって、好きな時に読めない。だって、一軒に一紙しかないんだから。読みたいと思っても、居候の私たちは遠慮してたの。だから、その家のご主人が、新聞を読み終わって置いたすきを狙って、さっと借りてきたりしたわ。燃料がないから、お風呂だって好きな時に入れないし。

そんな生活が嫌で耐えられなくて、泣く泣く帰ってみると、父が家を建ててくれたの。戦前からもっていた檜を使った、総檜の十四坪ほどの家。でも当時は、そう簡単には家を建てることもできない。許可を取らないとダメ。確か、家族が十人いないと家を建てることのできなかつたんだと思う。それで、近所の人に頼んで住民票を入

れてもらって、ようやく許可をとったの。

ようやく家もできて落ち着いてくると、主人が働きはじめた。私は主人よりも年上だったのよ。そのせいか、主人は、同僚の若くて綺麗な女の人に気が向いてしまって、帰ってこなくなっちゃった。

それに私たちにも子供が生まれたんだけど、すぐに死んでしまった。そんなことが重なって、別れることになったんだけど……。

別れることになって、私はその家を出たの。当時、姉（こぐれみちよ）（木暮実千代）の仕事が忙しかったから、私が付き人として手伝うことになった。姉に「明日は何時？」と聞くと、「八時に起きて、八時にご飯で、八時に出発」っていうほどハードスケジュール。普段の仕事から選挙応援……。私はどこにでもついていったわ。ホント、短時間での移動が多かったから、未だに外国旅行に行くと、荷物まとめるのが早いつて笑われる。

ちようど姉の付き人をしている時に、ここ（「旅館和可菜」）が売りに出されたの。持ち主は、広島で開設される競輪の権利を買ったために現金が必要で、ここを早く売りたいかったわけ。最初はお役所が

木暮実千代（こぐれ・みちよ）
本名・和田つま。日本大学在
学中から松竹映画に出演、卒
業後すぐに主役に抜擢され
た。「青い山脈」「帰郷」など、
三百本以上の映画に出演した。
また、広告界に進出した俳優
のさきがけてもある。社交家
で情に厚く、福祉やボランティア
活動にも熱心であった。



姉と

神楽坂にて



買う予定だったらいいんだけど、年の暮れだったせいか、役所はすぐにお金が出なかったのね。そんな話を聞いてきた姉が「じゃ、私が買う」って、買ったのよ。

それが昭和二十九年五月。それから私が、女将として働きはじめたの。

聴き手・まとめ 山川徹 わぐりゆみこ

平成十七年六月十四日、「旅館和可菜」にて

寄稿 『私的』土佐源氏』考

秋山真志（作家）

遅まきながら、宮本常一の『土佐源氏』（『忘れられた日本人』・岩波文庫所収）を読んだのは、四十の坂を二つ、三つ、くだった頃だった。それはまさにボクの人生を変えるコペルニクスの転回ともいべき読書体験となった。自分の半生のなかで、そうした体験は二度目で、ちなみに最初は十代の頃、読んだマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』である。これが人生を踏み誤らせた書であったと気付くのに、三十年近くかかった。気付かせてくれたのが、『土佐源氏』である。

『土佐源氏』は、土佐の山奥の橋の下に住む盲

目の乞食の話。宮本常一が聞き書きした一編だ。

「橋の下の乞食」というステレオタイプな乞食のイメージは、本書に端を発しているともいわれている。冒頭に近いところで、宮本常一の的確な情景描写が出てくるが、あとは全編、八十歳の乞食の「わし」が一人称で半生を語る。男はてて（父）なし子として生まれ、祖父母に育てられた。母は嫁入り先で、蚕に桑をやっているときに、ランプの油を全身に浴びて大やけどをして、むごい死に方をした。語られるのは、主に男の女性遍歴である。

「わしは八十年何にもしておらん。人をだますことと、おなご（女）をかまう事ですぎてしまった」

子供の頃、子守の娘たちと次々とまぐわった。年齢は書いていないが、娘たちはみな初潮前なので、おそらくまでいえば、小学校高学年が精々中学一、二年ぐらいだろう。「子守たちがおらにもいれて、おらにもいれていうて、男の子はわし一人じゃで、みんなに連れてやって遊ぶようになってた。(中略)あんまりええとも思わだつたが、それでもやっぱり一ばんおもしろいあそびじゃった」。

男は十五の歳に、博労(牛の仲買人)の家へ奉公に出された。その親方がスケベで、方々の後家とねんごろになった。そのうちの一人の後家の娘が、のちに男の嫁となる。親方の死後、男は後家と関係ができるのだが、ある晩、後家が寝ている間に、娘をものにしてしまい、娘を連れて逃げ出した。

……というようなギョツとするような話の連続

か「いうてきいたら「あんたは心のやさしいええ人じゃ、女はそういうものが一番ほしいんじや」といいなさつた」

それから四、五回会うのだが、「この人に迷惑かけてはいかんと思つて」、奥さんにも、本妻にも内緒で逐電する。「わし」は半年間、腑抜けとなつて暮らした。

もう一人の女性は県会議員の奥さん。「色が白うてのう、ぼっちゃりして、品のええ、観音様のような人じゃつた」。旦那は妾に三人も子供を産ませていたが、奥さんとの間に子はなかつた。この人も役人の奥さん同様、男を一人前に扱つてくれた。家に入りするうちに、奥さんが「牛の世話が好き」であることを知り、手をかけてはいかんと思いつつ、自分でもぐつにもならぬいへい、心惹かれていき、ついに一計を案じる。

奥さんの牝牛に種をつけるように持ちかけたの

なのだが、取りわけ、身分の高い二人の女性の話が印象的だ。一人は役人の奥さん。はじめは仕事で旦那に会いに行つていたのだが、いつの間にか奥さんに心惹かれていく。そのうちに「わしはどつしてもその嫁さんとねてみとうなつて、そのの家へいくと、嫁さんは洗濯しておつた。わしが声をかけるとニコツと笑つた。わしは『裏の大師堂で待つてるで』いうて、にげるようにして、その家の横から上へ上る小道をのぼつていった。(中略)もう小半ときも待つたろうか。夕方じゃつた。夕日が小松を通してさしておつたが、下の方から嫁さんがあがつて来る。緋の着物を着ていて、前掛で手をふきふき、ゆっくりと上がつて来なさるのよ。わしは上からじつと見ておつた。なんぼか決心の要つたことじゃろつ。わしはほんとにすまん事をする、と思つたが……。 (中略)「わしのよつな者のいうことをどうしてきく気になりさつた

である。その日、奥さんは牛をピカピカに磨いていた。「おかたさま(奥さんのこと)おかたさま、あんたのように牛を大事にする人は見たことがありません。どだい尻をなめてもええほどきれいにしておられる」というたら、それこそおかしそうに「あんなことをいいなさる。どんなにきれいにしても尻がなめられようか」といいなさる。「なめますで、なめますで、牛どうしてもなめますで。すきな女のお尻ならわたしたでもなめますで」いうたら、おかたさまはまっかになつてあんた向こうをむきなさつた。(中略)牝牛はすましたあと牝牛の尻をなめるので「それ見なされ……。」というた。「牛のほつが愛情が深いのか知ら」といいなさつた。わしはなアその時はつと気がついた。「この方はあんまりしあわせではないのだなア」とのう。「おかたさま、おかたさま、人間もかわりありませんで。わしならいくらでもおかたさまの……」。おかたさ

まは何もいわなかった。わしの手をしつかりにぎりなさって、目へいっぱい涙をためてのう。

わしは牛の駄屋の隣の納屋の藁の中でおかたさまと寝た」

それが春のこと。秋が来て冬になる前、おかたさまは肺炎でポックリと死んでしまった。「わしは三日三晩、寝こんだまま男泣きに泣いたのう」

それで極道の果てに、目がつぶれた。その理由は『土佐源氏』には書いていないが、おそらく梅毒絡みだろう。落語狂のボクは読みながら、明治期に活躍した噺家「盲の小せん」の話を出し出しかかかって、失明した。目が見えなくなつてからも、吉原でお職を張つたお女郎上がりの奥さんの手を借りて、高座に上がつていたという。

男は失明してから何十年ぶりかで本妻の元に帰つた。

一読して目からウロコが落ちた。ノンフィクションでこれだけのことが書けるのか。性を通して、人間の悲哀や業が見事に描かれている。なまかな小説よりよほど文学性が高い、と思つた。

解説で網野善彦も「本書のすべてを文学作品と受けとることもできる。『土佐源氏』を創作と疑つた人に対し、宮本氏は吉沢和夫氏に探訪ノートを示して憤つたという逸話があり（中略）実際そのような疑問がでてる程にこれは見事な作品なので」と記している。ボクは創作とは思わなかつたが、当然、作意はあつたと思う。ただ乞食のジイサンのお話を聞き書きしただけで、このような作品が生まれるべくもない。作品としてのよどみない結構、シーンが目には浮かび上がってくるような文章の描写力、さりげない心理描写、そして、何よりジイサンが、だれにも語つたことはなかつた話」を引き出すことのできる取材力。それらは総じて

「女ちうもんは気の毒なもんじゃ。女は男の気持ちになつていたわつてくれるが、男は女の気持ちになつてかわいがる者がめつたにないけえのう。とにかく女だけはいたわつてあげなされ。かけた情は忘れるもんじゃない。」

わしはなア、ひとはずいぶんだました。牛はだまされた。牛ちうもんはよくおぼえているもんで、五年たつても十年たつても、出あうと必ず啼くもんじゃ。なつかしそうにのう。牛にだけはうそがつけだつた。女もおなじで、かまいはしたがだましはしなかつた。（中略）そろそろ婆さんが戻ってくる頃じゃで、女のはなしはやめようの。（中略）ああ、目の見えぬ三十年は長つもあり、みじこつもあった。かまうた女のことを思い出している。どの女もみなやさしいええ女じゃつた」

わずか三十分ぐらいの読書時間だつた。ボクは

「旅の人であつた」民俗学者としての修練の賜物であり、また、宮本常一の人間としての魅力、ひとを見る目の温かさなどが縋い混ざつたうえのことだろう。

小学生の自分から文学少年であつたボクは、冒頭に記したように十代でマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』を読み、さらに文学青年特有の屈折度を増し、そのまま文学中年になつていた。自分の頭のなかに抜きがたい「小説至上主義」があり、ノンフィクションを一段低いものとして見なしていた。『土佐源氏』はそうしたボクの頑迷な盲信を一発で打ち砕いてくれた。

それからしばらくして、長年温めてきたノンフィクションの取材にかかった。三年して『職業外伝』（ポプラ社）という本になつた。宮本常一はボクにとって大恩人だ。

（秋山真志・作家）

編集後記

まず、創刊号を創るにあたり、協力してくださいました取材対象者の皆さんに、「ありがとうございます」と、心よりお礼を申し上げます。

さて、「昭和の記憶」がNPO法人として活動を開始してから、早三年目。今年の夏には、念願の新潟支部でのイベントを開催いたします。

この「三世代・平和学習会」というイベントは、子供たちに映画や高齢者の方々のお話を通じて、平和の尊さを学んでほしいという願いを込めています。昭和の時代が幕を閉じて十七年。日々失われていく「昭和の記憶」ですが、一人でも多くの方の記憶を残していきたいと思っております。(ゆ)

聞き取りを終え、あらためて先輩たちのご苦勞を思い、頭が下がります。そして「自分の人生を振り返ることができ、ありがとうございます」「今まで話さずにきたけど、こうして話して、ほっとしました」とのお言葉をいただき、感謝とともに重い言葉と受け止めております。今では、核家族が多く、祖父母の話を書くこともなく終わってしまう、「もったいない」ことがどんなに多いか、憂いています。

先人のご苦勞の下の日本の繁栄、忘れてはいけないことと肝に命じ、一人でも多くの方の昭和史を残すことができたかと思っております。(し)

お問い合わせ先

【本部】東京都千代田区神田神保町三丁目六六

九段アピタシオン三〇三

電話 〇三ー三三三三〇一八六四四

ファクス 〇三ー三三三三六七一五六八二

【新潟支部】新潟県上越市南高田町四番二十三号

活動紹介

NPO「昭和の記憶」は左記の五つを目標に掲げ、活動しております。

「昭和の記憶」を記録し後世に残す

世代間コミュニケーションの促進

地域内コミュニケーションの促進

高齢者の活性化、高齢者への尊敬の念の醸成

子供の「聴く」力の涵養、歴史地理教育

「聞き取り」活動

当団体のスタッフが、高齢者の方々のお宅にお邪魔して、昔の思い出をお聞きします。お聞きしたお話は、ホームページに掲載するか、または冊子にまとめてプレゼントいたします。

また、「聞き取り」活動を広げるイベントなども開催しております。

自費出版「昭和の記憶草書」

インタビューした内容の書籍化サービス。お世話になった父母、祖父母への贈り物としての奨励しております。

会報誌（季刊誌）の発行

年に四回発行。会員の方々には、無料でお配りします。

今回も、取材（「聞き取り」）をさせて頂いた方々は、皆さん戦争経験者です。戦争が良い、悪いということではなく、経験した方々の昭和時代の思い出、このまま記録せよにあれば消えていってしまう個々人の思い出の数々を、これからもこの「昭和の記憶」では綴ってまいります。

長い長い人生、たくさんの思い出をこのページに収めるのはとても大変です。しかしながら、この一頁一頁を見ながら、「昭和」という激動の時代を生きて来られたみなさんの思いを、少しでも多くの方々に知っていただけたらと思います。

高齢者からの「聴き取り」を通じ、その記憶を後世に伝えていくという私たちの取り組みは、色々な方面の方々から賛同を得ながら、盛り上がりを見せております。

それは、時代の流れによって、より地域コミュニティの充実や世代間コミュニケーションの促進が重要さを増してきております。私たちの活動に対する共感、こうした時代を背景とし、そこに問題意識を持つ人たちの要請を受けてのものであると認識しております。

さてこの度、二つして季刊誌を発行するはこびとなりました。これは、会報誌として、賛同してくださる皆様に、私どもの活動をご報告する機会とするともに、時代を生き抜いた人たちの物語を共有して頂きたいという想いが原動力となっております。

今後、この季刊誌を通じて、日々失われる昭和の記憶を後世に残していくことができたらと考えております。また同時に、崩壊しつつある地域コミュニティの復興の一助となれば、弊団体としてこれ以上の喜びはございません。

平成十七年六月

昭和の記憶 季刊誌
しせい
市井の昭和史
平成 17 年夏号

昭和の記憶ブックレット No 3

発行日 平成 17 年 8 月 1 日
発行所 特定非営利活動法人「昭和の記憶」
印刷所 株式会社平河工業社

特定非営利活動法人「昭和の記憶」

平成 15 年に認証された NPO。高齢者からの聴き取り調査、子供向け聴き取りイベントの開催などの非営利事業と、聴き取り内容の書籍化サービス（「昭和の記憶」叢書）等を行っている。

〒 101-0051
東京都千代田区神田神保町 3-6-6 九段アビタシオン 303
TEL:03-3230-8644 FAX: 03-3267-5682
メールアドレス：mose@c22.jp
ホームページ：http://www.memory-of-showa.jp